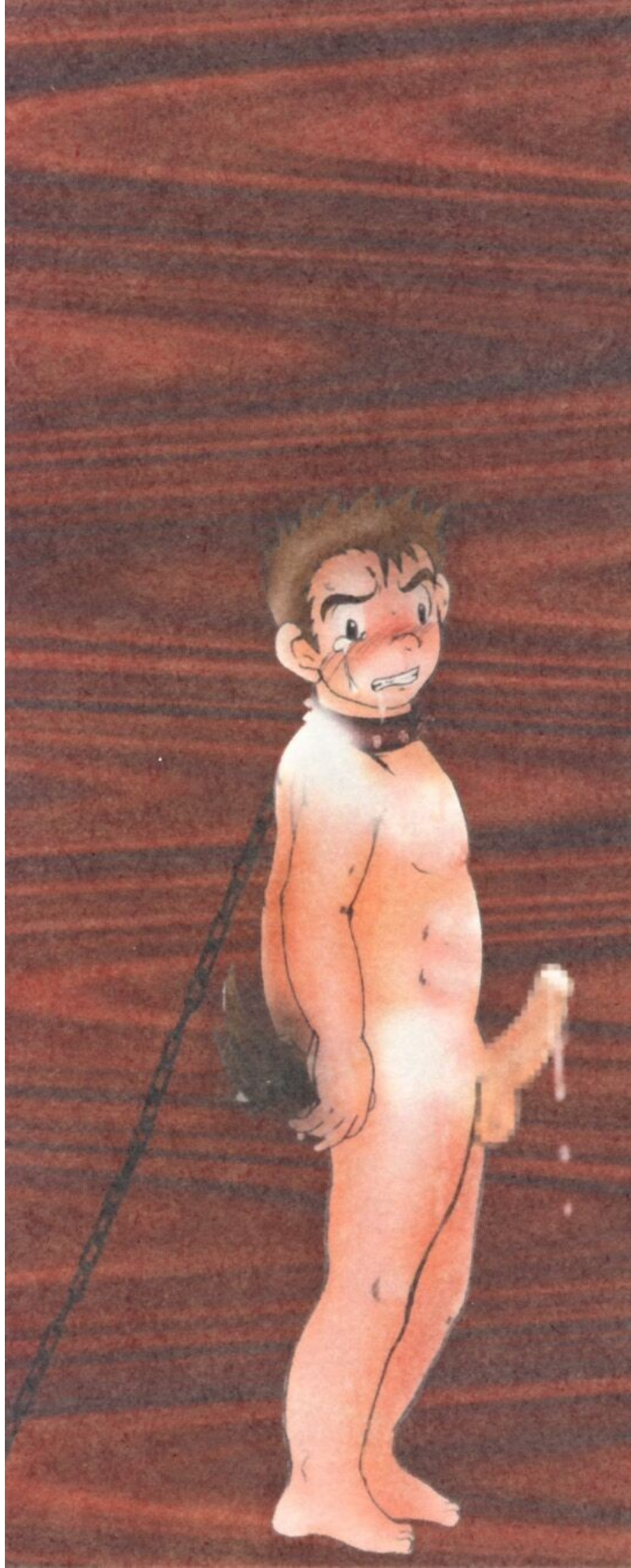


# 犬小屋

いぬごや




成人向  
コミック



## 愛犬家の皆様へ!!

- 犬のふん、おしっこはきちんとかたづけてください。みんながめいわくします。
- 散歩の際は、犬に必ず引き綱を付けて手を放さない様にしてください。
- このお話はフィクションです。現実レベルにおいての虐待行為を推奨するものではありません。実際に人間を監禁して飼育するのは犯罪です。飼うのは「イヌ」だけにしましょう。



動物はきちんと  
愛情と責任を  
持って  
飼いましょう!!



ここで飼われるようになってから、何度目の朝なんだろう。今日は何月何日なんだろう？ カレンダーも目覚まし時計も、学校のチャイムも、時間割も、今のぼくには何の意味もない。

ぼくは犬になったから。ならされたから。

「やあ、元気？」

ぼくの【飼い主】のおじさん。ちよつと見は人が良さそうな、動物好きなおじさん。だけど、変態だ。

「すごいねえ。あれだけあったエサ、空っぽにしちゃって、お皿がつるつるだね。きれいに舐めたんだ。……まあどんな犬だって飛びつく上等のエサなんだから、今までがおかしかったただけだよね。へへ……」

「……ぼく、うちに帰りたい……ぼく犬はいやだ。……うちに帰して……」

泣きべそをかいて頼んでも、無駄だってわかっていた。もしかしたら、叩かれるかもしれない。エサを抜かれるかも知れない。それでも、ぼくはおじさんの満面の笑顔を見上げて、そう言わずにいられたんだ……。

誰か、助けて。

この犬小屋以外ならどこだっていいから。

犬小屋 原作 飛力空灼

清書 とりさん

## 第一章 捕獲される犬

「犬は好きかい？」

店主のおじさんに、声をかけられた。

「最近よく来るよね。家は近所？」

ペットショップのおじさんは、おだやかで優しいような声で、ぼくに話しかける。ここには犬や猫が檻に入れられてたくさんいた。これから売られるんだから、大きいのもいるけど、だいたいまだ幼い仔犬や仔猫ばかり。じっと見ていると、一緒に散歩したり、寝たりしたくなる。

どちらかと言えば犬が好きだ。きゃんきゃんうるさいお座敷犬より、シェパードみたいに大きな犬を飼いたい。

「あつすみません。何も買わないのに見るだけで……」

「いいんだよ、動物が好きなのは大歓迎だから、ゆっくり見ていきな。どうせ他にお客さんもないし」

店主のおじさんは柔らかい笑顔でそう言ってくれた。

「触ってもいいよ。どれか出してやろうか？」

「え、ほんとにツ？いいの？やったあ！」

うれしくて、飛び上がりそうになった。

ぼくは大きなハスキー犬の檻を開けてもらい、その首筋にこわごわ手を触れた。動物のにおいだ。舌を出してハアハアいつている。ぼくは犬の濡れた鼻に自分の鼻をくっつけて、首の下あたりを、指で撫でてやった。ハスキー犬はなんだか不思議な目をしている。考えていることが、わからないんだ。

「いいなあ、こんな大きな犬が飼えて」

おじさんは吹き出した。

「商売だからねえ」

その言葉に微妙な含みがあるってことは、その時のぼくには全くわからなかった。しゃがんだぼくにのっかっつきそうなほど興奮しているハスキー犬と同じくらい、ぼくは舞い上がっていたから。



「ぼくんち、マンションだからペット飼えないんだ。  
…いいなあ、こんな大きな犬、飼いたいなあ」

「ふふ、うちのライガーがお気に入りがかな？」

「うん！ こいつ強そうだし、カッコいいし…あーあ、  
こんな大きな犬と、一緒に暮らせたらな」

「暮らせないこともないさ」

「え？」

どういうこと？

ぼくの言葉の尻にかぶせるタイミングで、おじさんは  
ぼそつと言った。カウンターを抜け出して、少し後ろに  
しゃがんで、ぼくの肩を、そつと触る。

「君がここに住めばいいのさ。こいつと一緒にね」

耳のそばで囁くおじさんの声色がすっかり変わって  
いることも、振り向いてちらっと見たおじさんの目から、  
あの柔らかい光が消えてしまっていることも、あとにな  
ってみれば思い出せるけど、その時のぼくはそんなこと

にも気が付かず、ライガーに頬ずりしながら、笑ってこ  
う答えただけだった。

「やだなあおじさん、そんなことできるわけないじゃ  
…」

ぼくは首筋にチクリとした痛みを感じた。

「あ…」

頭がくらくらする。急に眠くなって、目の前がぼーつ  
として、ぼくはライガーの足もとに、頭から崩れ落ちて  
しまった。

「簡単だよ…簡単さ…犬になって…ライガーと  
一緒に、ボクのペットに…一緒に暮らす…」

切れ切れに聞こえる言葉は、ぼくの知っているどんな  
大人からも聞いたことがないような、ねちねちした悪意  
に満ちていた。ぼくはからだをおじさんの手で抱えられ  
ている。そしてぼくは、真っ暗な闇に落ちていった。何  
も見えず何も聞こえなかった。

ここはどこだろう？

ぼくは朦朧とした意識の中で思った。からだが痛い。

口が塞がれているわけでもないのに何か息苦しくて、毛布か何か、自分のからだにかぶせられているのかと思っただけ違う。突然の異常にぼくは混乱し、本能的に、手足をばたつかせた。けど、自由に動かせない。何かからみついている。手足は接着剤で床に貼り付けたみたいに動かない。

なんだこれ!? 何だよ……

ぼんやりとした光の円がいっぱい、それしか見えなかったけど、だんだんまともに周りの状況が見えるようになってくる。

ぼくは硬い床に手足をついて、四つん這いだった。下

を見ると手の先が、何かにくるまれている、しかもそれが、紐か何かで床のパイプみたいなのに縛られている。手をあげることも引き寄せることもできない。足も大きく開いた状態で、足首から先は、布の袋みたいなのにくるまれている、よく見えないけどやっぱり縛られているみたいだ。膝について、足を開いた姿勢のままほとんど動かせない。

そして……そしてぼくは裸だった。パンツも穿いてない。下からのぞくと、開いた足の間にぼくのちんちんが見えた。

なんだこれ……何これ……?

夢なんだろうか。ぼくは泣き出しそうだった。こわい。

床についた膝が痛い。何だか息苦しい。

それでも懸命に、手足を動かしてみる。靴と手袋みたいなものはずれば、どうにかなるかもしれない。ぼくは必死だった。汗びっしょりになりながら手足を曲げ

られるだけ曲げて突っ張って……。

そうこうしているうちに、手袋と靴の正体が、何となくわかった。着ぐるみのような、動物の手足をかたどった手袋と靴なのだった。

夢じゃないなら、誰かがぼくにこんないたずらをしたんだ。いたずらと呼ぶにはひどすぎるけど、現実にはぼくは、素っ裸で、四つん這いで足を開いて、おしりもおちんちんも丸見えで、動物の手足をつけて、動けなくされている。誰かが……誰かに助けて欲しいけど、こんな人に見られたら、ぼくは……。ぼくはとても自力で逃げられないのを悟ると同時に、急に恥ずかしくてたまらなくなつた。顔が火照つて、からだは熱かつた。

大声で叫んだら、人が来てくれるかな？ でもこれを見られる。恥ずかしい、最近はお母さんにだってちんちんなんか見せないのに……！

何これ？ ここはどこなんだ？ ぼくはどうして……

ほんの少し冷静さを取り戻した頭で、ぼくは考えた。そのときぼくはやつと気づいた。さつきからずっとぼくの鼻が感じていた独特の臭い。獣の臭いだ。

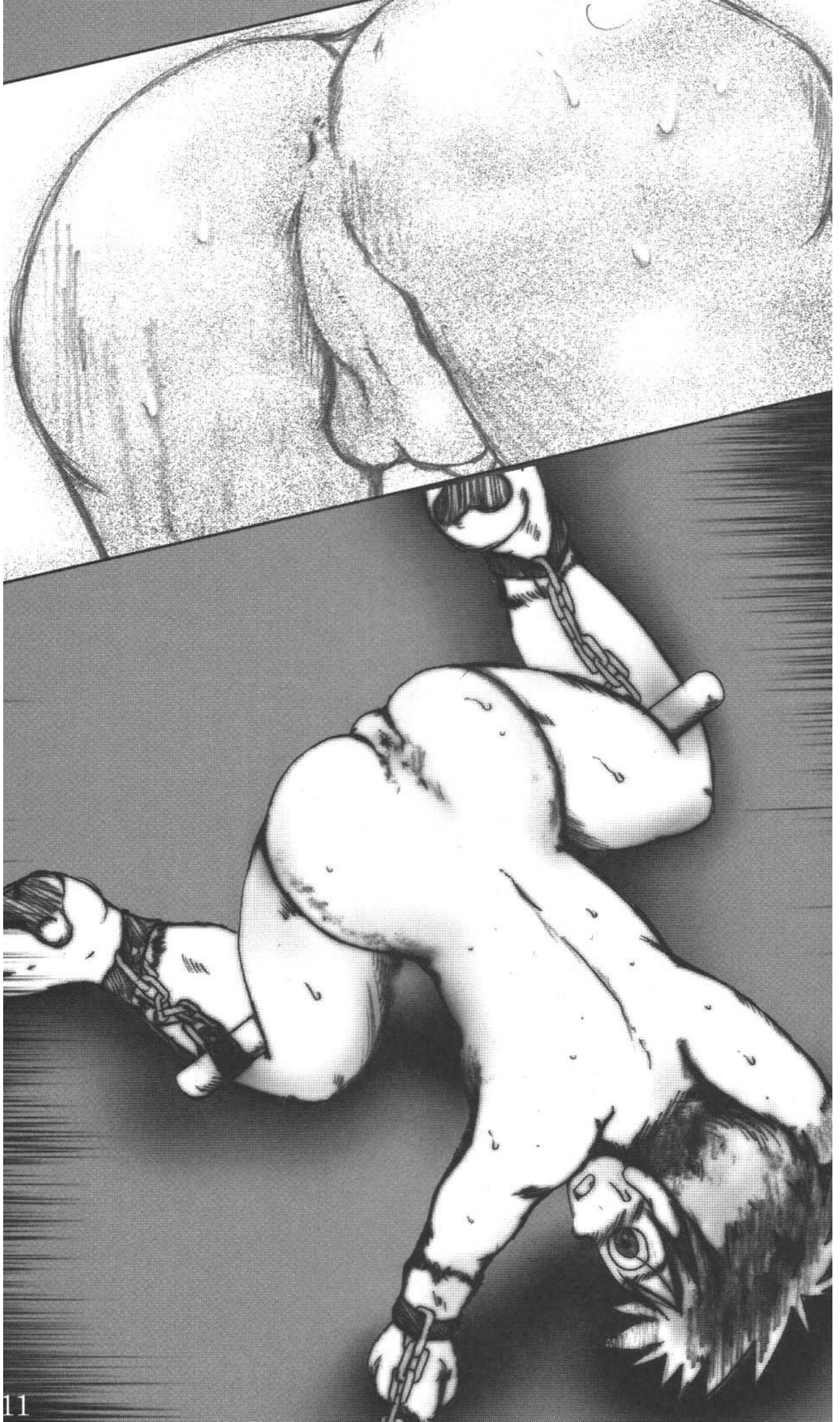
そうだ、ぼくはペットショップにいた。ライガーを触らせてもらっていた。それから急に眠くなって、からだの力が抜けて、あとはわからない。

そのときだった。ぼくは自分の背後……四つん這いのお尻の方に、人の気配を感じた。

「だ、誰！？ 誰かいるの？」

ぼくは怯えていた。あの時、なんで助けてと叫ばなかったのかわからない。だけど、その気配の持ち主はきっとぼくを助けてくれる存在ではないことを、きつと本能で感じ取っていたんだろう。

助けて、と言わなかったぼくの勘は正しかった。けど、すでにそんなものは何の役にも立ちしなかったんだ。



## 第二章 躰られる犬

「お、おじさん……」

後ろから、身動きできないぼくの横を歩き、ぼくの斜め前くらいまで来て、からだの向きを変えた大人の人。

それはあのペットショップのおじさんだったけど、ぼくの知っているあのおじさんと、同じ人とは思えなかった。

確かに口元は笑っているけど、笑顔の意味が違う。ねちねちとした、嫌な目で見下ろされてぼくは寒気がした。

「おじさん……？ 何なのこれ？ おじさんがこんなことしたの？ どういうつもりなんだよ？ はずしてよ！ ……何でこんなことするんだよ！」

おじさんの目がこわくて、とても乱暴な口はきけなかった。ぼくの声は泣きそうだったと思う。

「のぞみをかなえてあげたのに、ずいぶんな口を利くんだね」

口調も、ぜんぜん違う……。こわい……。それに何が言いたいのかぼくにはわからなかった。

おじさんは諭すように続けた。まるで学校の先生みたいな、静かな喋り方で。

「ライガーと一緒に暮らしたいと言ったろう？ だからボクの飼い犬にしてあげた。犬なんだから、その格好が当たり前だろ、うん？」

飼い犬……？ その言葉にぼくは自分の格好をもう一度見た。確かに犬みたいに四つんばいで、鎖でつながれている。これが動物なら別に変なことじゃない。

だけど、誰がどう見たってぼくは人間だ。こんなことされなくちゃいけない理由なんか、ない！

ぼくの頭に血がのぼる。この人はおかしい。ぼくは、ぼくは……。

「やだよ、ぼくは犬なんかになりたくない！ 早く服を返して！ これをはずして！ 家に……」

「うるさい犬だな」

ぼそつとした、また今まで聞いたことのない低い声。

ぼくはお腹の下の方が重くなって、声を出せなくなってしまおう。

おじさんは大股で歩くと、壁際から何か、ベルトのよ  
うな黒くて長いものを手に取って、すぐにぼくの横に戻  
った。おじさんの姿は見えない。だからおじさんが何を  
するつもりなのかわからない。

瞬間、ヒュンツと風を切る音がして、次の瞬間、背中  
に猛烈な痛みが走った。

「ぎやっ……ああ!!」

何かで、あのベルトみたいなので、叩かれた。背中が  
燃えるように痛い。ぼくは手足が動かせない状態で、か  
らだをひねって苦しみ悶えた。

「痛あ……い……!」

「バカな犬だ……たっぷり躰が必要だなこれ・は!」

また風を切る音。そしてばしつという重い音。激痛。

「いぎッ……あ……やめ、やめて……」

最後の方は涙声になっていたと思う。痛い、痛い痛い  
……。こんな痛みをぼくは体験したことがない。

鞭が、連続してぼくの背中や、お尻に振り下ろされて、  
ぼくは頭や、お尻や、動かせるところを全部動かして悶  
えていた。背中が熱い。火傷みたい。傷だらけになって  
いるはずのところ、おじさんは鞭を振り下ろす。もう  
おじさんの顔を見る余裕なんてない。目を開けることも  
できない。

少し間が空いた。叩かれたところが、火傷のようにじ  
んじんしてくる。痛みが背中にいつまでも残って、苦し  
い。背中が熱い。自然と口が大きく開いて、喉から熱い  
息がこぼれた。

でも、これで終わりじゃなかったんだ。

「ぎひ、ア……やめてーッ……許して……」

今度は背中じゃなくて、お尻の柔らかい肉に、がんがん鞭が振り下ろされる。柔らかい場所だから、背中よりもずっと痛みが頭に伝わって、まるで脳みそのある場所に嵐でもやってきたかのようにだ！

ぼくは泣いているのに、どうしたらやめてくれるか考えて、泣いて、許してって頼んでるのに、おじさんはそのたびに余計力をこめて、痛くしてるように思える。酷い、痛い、いやだ、やめて……！

「ぎえっ……」

一瞬目の前が真っ白になった。下腹が苦しい。鞭が、ちんちんの玉に当たったみたいだ。そして、お尻の穴の、しわとか、粘膜みたいな、唇みたいに柔らかいところを、続けて硬いもので打たれる。ひゅんひゅんと風を切るその音は、確かに鞭の音なのだけど、あまりにも痛くて、硬い鉄の棒で、叩かれてるんじゃないかと思った。

血だらけになっちゃってるんじゃないかな。泣いてもわめいても、許してくれない。もう苦しい。からだじゅう熱いのに、寒気がする……。

ぼくは、殺されちゃうのかな……？

「ぎやううう！」

強烈な一撃が、二回目、タマにあった。きっと狙ったんだと思う。そして、鞭が止んだ。いや、おじさんが休んでるだけかも知れない。燃えるような熱さが、またじわじわと全身を責めてきて、ちんちんのあたりは、そこからぼくの下腹を締めつけるように苦しめていた。

ぼくは床にこぼれた自分の汗とよだれのあとを見た。腕の間からのぞくからだの下に……。見ない方がよかつた、血の痕が少しだけだけ点々と。

「もう、やめて……」

と声を絞り出した瞬間、下腹の鈍い痛みは、はっきりとした鋭いものになった。おじさんがぼくのタマを、力

一杯握りしめている。ぐりぐりと揉んでいる。

「い、い、痛いー！ やめてえ！」

「ギャンギャンウルサイ犬だ。このままここ潰せば、

少しは大人しくなるのか、な？ んー？」

「や、やだ！ いやだー！ 潰さないで、やめろっ！」

いやだあゝっ！」

ぼくの横にしゃがんだおじさんは、ぼくの顔をのぞきこみながら、まだぼくのちんちんの玉を右手でぐりぐりしている。少し、力は弛んだみただけ。

「お、お願いします……もうやめて……」

ぼくは、小さな声で哀願した。わめいたら怒るのかもしれない。こわい。どうしたら許してくれるんだろう？ 少し間があつて、気づくとぼくは、びっくりするくらい全身ガタガタ震えていた。

「質問するぞ。お前は誰だ？」

低い、抑揚のない声だった。答えられないでいると、

タマを握ってる指先に微妙に力がこもる。

それで、やっとぼくはおじさんの言葉を心の中で反芻することが出来た。

…オマエはダレだ…？

「う……ぼ、ぼくは……」

どう言えればいい？ おじさんの、こいつの、気に入るように……。おじさんはぼくを犬だと言った。ぼくを犬にしたいのかもしれない。だったら、ぼくは……こう答えないといけないのだろうか。

「…ぼくは……犬、……です」

「聞こえないな。さっきわめいたみたいに大きな声で言ってみな」

「ぼくは、い、ぬ、です！」

おじさんは笑ったみたいだ。

「ほう？ 野良犬か？」

「お……お、おじさんの……犬……です！」

「どうだろう……？」

「そうか、お前は犬なんだな？　ボクの飼いな犬なんだ？」

おじさんがタマを握る。返事しなきゃ……。

「は、はい……」

ぎゅううう！　また、強く握られる。

「はい！」

やっと手が、ぼくのタマから離れる。今度は指先でぼくのちんちんの玉を転がすおじさん。気持ち悪い。

こんな頭のおかしいやつに、ぼくは、自分は犬だと言った。裸で、四つん這いで、犬の手足をつけられて。殺される恐怖がほんの少し遠ざかると、ぼくは恥ずかしさに、唇を噛んだ。

殺されさえしなければ、きっと誰か助けに来てくれる。

この店に来て何時間経ったかわからないけど、きつともうお父さんやお母さんは心配して、近所を探してるかも

しれない。

「へへへ、意外と物覚えは早いようだな。なかなか仕込みがいがありそうない犬かもしれないな。バカ犬なんて言つて悪かったな」

一人で悦に入っていたおじさんは、ぼくの頭を犬みたいに撫でる。寒気がして、ぼくはその手を首の動きで振り払いたいのを必死でこらえた。くやしい、くやしい！　けど殺されたらおしまいだから、今は……。

「うーん。型もいい。健康だし、無駄な肉もついてない……これはいい犬を拾ったものだ……」

下腹や背中を指先でくすぐるように撫でられた。おっぱいとカチンチンも触ってくる。：嫌だ、触るなっ！　やめて、やめてよお……。痛みと恐怖は引いたけど、さつきとは別の、涙がにじむ。

「おや、だが犬にしては、何かが足りないなあ……」  
おじさんは、ぼくのおしりに手を置いてそんなことを

言っている。

それからやにわに、おじさんはぼくの背にまたがり、両脇から手を回して、ぼくの乳首をつまんだ。そして指の腹でつねるようにする。大人の指はゴツゴツしてて、それだけでとても痛い。

「あッ……い……」

「なあ？ 何が足りないと思う？ 賢いワンちゃん？」  
完全にこのおじさんはおかしい。左手は乳首をくすぐっていて、右手が、お尻にまわって、ぼくの傷だらけのお尻を、なで回して、ちようどお尻の割れ目にかぶせるような位置で止まったと思うと……お尻の穴に、ぼくのお尻の穴に、何か入ってくる。ごわごわした硬いものが……指だ。こんなところに、指をいれようとしてる。反射的にぼくはお尻を動かした。汚い……！

「いッ……何するんだよう……！」

乳首をつねられた。指はぐっと深くつつこまれた。気

持ち悪い。うんちが漏れそうだ。やめて……。

……そのとき、背筋に寒いものを感じた。見上げる勇氣もわからないけど、おじさんが睨んでるんだ。そうだ。逆らっちゃいけない。殺されちゃうかもしれないんだ……。

「やめて、ください……」

「これはヒントなんだぞ？ 賢い頭で考えてみる」

指が抜かれて、今度はお尻の穴のしわをこすっている。全身に鳥肌が立ってからだの力が抜けそうだった。

「ここに、何か足りないんじゃないか？ さあ、考えろ？ 何が足りない？」

メリーゴーランドの木馬に乗るみたいに、ぼくの背中の上でからだを揺すって、おじさんはぼくの苦しみや恥ずかしさに関係なく楽しそうにしゃべりつづけている。乳首をこすり、お尻の指を出したり入れたりしながら。

「さあ答えろ。犬のおしりには何がある？」

### 第三章 糞をする犬

「せっかく耳も手足もつけてあげたのに尻尾がないんじゃない、できそこないだ。かたわの犬じゃ、いい値がつかないね」

値段という言葉にぞっとした。ぼくは人間だ、人間だ！ 売り物じゃない、ペットじゃない、犬じゃない。ぼくは歯を食いしばって頭を振った。おじさんはそんなぼくに構わず暗がり消えて、すぐに戻ってきた。手に「尻尾」を持って。手足とおそろいの色の薄黒い、布か毛糸かで作ったみたいな尻尾だったけど、おじさんがつかんでいる尻尾の根本側には、学校でポスター描きに使うみたいな極太マーカーくらいの太さの、黒い、ゴムかプラスチックの長い棒がついていた。棒から尻尾が生えてる形と違って、尻尾のついてない方が太く丸く、一度くびれて

だんだん太くなっている。こけしを逆さまにしたみたいだ。のつぺらぼうのこけしは不気味だった。あとから思えば、ぼくには不吉な予感が十分あったんだ。さっきのおじさんの言葉と、結びつけて。

ぼくはそれを、まばたきもしないで見つめ続けていた。「いい尻尾だろ。かっこいい犬になれるぞ。…さあ、コイツを肛門に、はめてごらん」

「……えっ……」

意味のない声を返すのにすら、どれだけ時間がかかったか。異常事態の連続に、ぼくの頭はバカになっていく。

「と、そういえばもう手足は犬だったな。自分では、できないねえ、げへ。じゃあボクがやってあげるよ」

おじさんは「尻尾」を逆さにして、ゴムの頭をべろべろ舐めはじめた。その舌の動きと濡れるゴムの棒を見てみると、ぼくの連想は次第に、そのゴムの棒を、別のものに、みだらで汚いものに、見せ始めていた。

「さあ」

おじさんがぼくのお尻に手を触れた。ぼくは動かない手足に精一杯力を入れて、腰を逃がす。

「やめてッ！やだよっ！」

「おいおい、お前は犬なんだから。尻尾のない犬がいるかい？ ボクはできそこないの尻尾のない犬はいらないんだな」

「やだ！ そんなのお尻に入れるなんて絶対やだ！

ぼくは尻尾なんかいらぬ、ぼくは……」

犬なんかじゃない、そう叫ぼうとした。

けれどぼくは、続きを口にできず、口をつぐんだ。おそろしい眼を見た。おじさんの凶暴で冷たい目、ぼくを鞭でめちやくちや殴ったときの目だ。鞭の痛み、下腹の、あのタマを潰れそうなほど握られた時の苦しき、殺されるんじゃないかっていう怯え……ぼくの、抵抗する気持ち、逆らう意志が、しぼんでなえて、ただおそろしさ

に食いつぶされていく。

「お前犬だろ？ 自分で言ったじゃないか。ぶさいな駄犬はボクはごめんだ。いらなくなった犬はどうするか知りたいのか」

おじさんの声は大きくて、さつきよりもヒステリックな響きが増している。ぼくはうつむいて震えるしかなかった。

「……それともまた、自分は犬じゃないとでも言い出すつもりか……」

おじさんが鞭をつかんだ。

「ああ！ やだっ！ ぼ、ぼくは犬ですー！」

ぼくはこわかった。だから考える余裕もなく助かりたくてそう叫んだだけなんだ。恥ずかしいことじゃない、はずなんだ。だけど……

「そうだな、お前は犬だ」

「……は、はい、でも、でも……」

鞭が置かれて、またあの「尻尾」を持ったおじさんを、ぼくはただ見上げる。許しを乞うように。

「かっこいい犬にしてやろうというのに、何を嫌がる……ふむ、そうか」

おじさんはあごに手をあてて、いやらしい笑みを浮かべていた。お腹の下の方が、不安で重くなる。

「中身が、たまっているな？　きれいにしてからでないと、栓をされたら困るからな」

おじさんはまた暗がりには消えた。何を言っているのかさっぱりわからなかったけど、ぼくにとっていいことが予感できる要素は、何もなかった。

戻ってきたおじさんの手には薄いピンクのプラスチックの容器が握られていて、いつそわからないほうがまだ良かったかもしれないのに、ぼくにはそれが何かかわかってしまった。

イチジク浣腸。ほとんど出番がないけど、うちの救急

箱にも二個くらい入っている。小学校にあがる前に、一度だけ使われたことがある。お腹がばんばんになって苦しかったとき。あの頃は、足開いておしりをおかあさんに見られても、そんなに恥ずかしいとは思わなかった。

使い方を知ってたから…何をされるのか、頭が理解して、ぼくは恥ずかしさと悪寒で体が震えた。

「お、もしかして知ってるかな？　じゃ、説明はいらん」

「あ、や……おじさんやめて、やめて……あ……」  
おしりに硬い、いやな感触があつて、冷たい液体がじわつとぼくの中に入ってくる。

「や……めて……」  
ちからが抜ける。そして腸の内側からかゆみと痛みの間みみたいな感触がする。ぼくの腸の中を、何かがひっかいてるか、かじっている。プラスチックの管が抜かれ、そして、ビニールを破く音。

「ほら、二個目だ」

「あ……うう……やめ……」

また冷たいのが入ってくる。ものすごく気持ち悪い。そして、下腹が重く、痛くなってくる。

「簡単に飲み込んだなあ。こりや、もう二、三個必要か？ どうだ、気持ちよくなってきたのか。お前の顔、うっとりしてるぞ」

ぼくの顔を覗き込むおじさんの、にやついたイヤな顔。うっとり？ ふざけんな、違う、いやだ、気持ち悪い、苦しい、苦しいんだよ。うんち……したい……漏れそうだ……。

おじさんはぼくのお腹と、お尻を、それぞれ手のひらでさすりだして、お腹の方は時々、ぐっと力を入れて押してきた。気持ち悪い、寒気がする。やめて……漏れる……。グルグルおなかの中で音がしているのがわかった。限界だ、やばい。

「と……トイレに……」

ぼくは絞り出すように言った。おじさんのニヤニヤした気色悪い顔を見上げて。

「犬にトイレなんかいらないだろ。四つん這いでこのままやるんだよ ブリブリツてな」

信じられないセリフだった。

「い、いやだ！ お願いだからコレ、はずしてよお……！ あ、も、漏れる……！」

「……まったく困った犬だなあ。そんなにイヤなら仕方ないな、ほれ」

そう言うとおじさんは、足の鎖に手をかけている。

「は、は……はやく……おじさん……」

理性もプライドもない。それどころじゃなかった。おじさんが四つの手足の鎖をほどく様子は、スローモーションみたいで、ぼやけて見える。

「全くうるさい犬だ。ほらはずれたぞ」

ぼくはその言葉が終わる前に、腰を上げようとして、足を動かし、その瞬間、猛烈な痺れを感じた。考えてみれば当たり前だ。長い時間ずっと四つん這いにさせられて、ぼくの手足は、とくに膝は、完全にかたまって痺れていた。前につんのめるようになり、痺れと痛みを堪えたとたんにお尻の方の力が、抜けてしまった。

「ああ……あ、あー！ー！」

中腰の姿勢で、ぼくは猛烈にうんちを漏らした。ぞくぞくと鳥肌がからだに走る。その瞬間、少しの間、苦痛がどこかにいき、一瞬の開放感を感じる。頭はぼんやりとするけど、お尻から漏れるものが、止まらない。ぼくは津波のように押し寄せる恥ずかしさと悔しさにおそわれる。

足の裏に冷たい、いや、生暖かい汁が浸る。腿の裏側にも、汚いものが……いやだ……やだよ……！

「見るな……みな、いで……あ、ああ……ッ」

臭いと、音、お腹の中で繰り返すあの痛み。おじさんのバカ笑いは、わんわんと頭に鳴り響き続けている。舐めるように見られていた。汚れた下半身、床に流れた汚物にぼくの膝は浸かっている。

「ああ、ああ……ああー！ー！」

「あーあー、随分漏らしたな！ やっぱりダメ犬なんだなお前は。躰のいい犬は、主人がいいと言うまではクソもがまんできるものなんだよ。一日くらいはな」

ひどいショックに打ちのめされているぼくを、さらになぶる言葉だった。違う、違う、違う……ぼくは……

ぼくの抗弁も待たず、おじさんは続けた。

「粗相のくせはすぐには直らんからな。この際、徹底的にきれいにしてやるよ」

わざとらしいため息とともにおじさんは立ち上がった。今度は両手で、大きなガラス瓶みたいなのを抱えてきた。この上、何をしようっていうんだよ？

ガラス容器は取っ手つきで、ちょうど瓶を逆さにしたようになっている。取っ手をおじさんは握っている。瓶の部分はお茶のでかいペットボトルより太く、だけどもじかくて、ずんぐりしていた。中で透明の液体が揺れている。細くなった下の方の口から、細い肌色のゴム管が伸びていて、先には、白いプラスチックの丸いのがついていた。

「うちはペットショップだからな。家畜用のイルリガートルだ。丸々2リッターの濃いめのグリセリン液が入ってるんだ。大型犬もすつきり」

おじさんが楽しそうにしゃべってることの内容は全くわからない。ぼくは抗うすべなくまた四つん這いにさせられ、お尻にゴムホースを押し込まれた。

お尻の中に、さっきよりもすごい勢いで冷たい液体が入ってきて、ぼくはそれが浣腸だってやっとな理解できた。

「ほうら、どんどん入っていくぞ」

「やめて、やめてー！ー！」

ぼくは逃れようと立ち上がった。今なら、足が動く。けど、二本足でかかるとに体重がかかった瞬間、鋭い痛みが足の裏を、文字通り突き刺したんだ。

「う、うあああ!?!」

「言い忘れたな。その履き物は二重底になっていてね。うっかり立ち上がると靴の底の鋏が飛び出るしかけなのさ」

つんのめったぼくのお尻に、またホースを挿し込みながら、おじさんはゆうゆうと説明する。ぼくの足に固定されたものはただの飾りじゃなかった。犬歩き強制器。これを履いている以上ぼくは一生、二本足で立つことができない。人間のように歩くことが、できないんだ。

さっきよりもすごい勢いで、ぼくの腸の中に冷たい液体が、流れ込んでいる。勢いよく水の出るホースを押し込まれてるみたいだ。おなかが破裂しそうだった。

「苦しいか？ 逃げたければ逃げてもいいぞ。立って走れるもんならね、へへ、げへへ、へ！」

ぼくは四つ足で、必死で前に這い進んでいる。けれどそんなんで逃げられるはずなんてないんだ。おじさんはおもしろがって追いますがっては、ぼくのおしりにより深くホースを押し込んだ。

お腹が苦しくて、内側からかきむしられるように痛くて、頭がくらくらしそうだった。がまんしたって時間の問題なんだ。苦しみが長く続くだけだ。

「ア……ハア！ ウツ……」

ブシュツというような音がして、お尻から液体が噴き出した。うんちを漏らしてる感覚はなかった。液体がぶしゅ、ぶしゅ、と吹き出して流れて、ぼくは痛みから解放される。ああ、楽になれる。ぼくの目線の間近の床に、汚い液体が拡がって、足にからんでる液体とか汚れが、気持ち悪い。

「見ろ、まだ汚いだろ。休む暇なんてないぞ」

おじさんは、ぼくのお尻に、またホースを押し込んだ。お腹に液体が、また入ってくる。

「やめて……もう許して……いやだ……やだよ……」

苦しみに悶えて、ぼくは汚れた床に頭をすりつけるようにして、また哀願していた。お尻の感覚も、お腹の痛みも、いつか麻痺して、何だか別の感触にすり替わっていた。でも楽になったなんてもんじゃない。ただ痛いだけよりももっとつらい感触だった。

ぼくは、たぶん十回以上、浣腸され、排泄させられて、おしりの感覚はもう、腫れぼったくて、自分のものと思えなかった。そして疲れ切っていた。

ぼくは力なくべったりと、自分の垂れ流した汚物の池に、胸と頬をつけて横たわっていて、声も出せずに喉の奥で泣いていた。

「ようやく、きれいになったな。これで準備オーケーだ」

おじさんは、今さらだけどまるでぼくをペットのように見下ろしている。そして自分はご主人様だ。

ぼくは……ぼくは……今のぼくが、まともな人間だと言えるだろうか。誰にも見られたくない。昨日に戻りたい。助けて。

獣と、自分のうんちのおいで臭いこの部屋。こんなところに居たくない。犬なんか、なりたくない！



#### 第四章 名づけられる犬

ぐったりしているぼくを尻目に、おじさんはモツプミたいなので、ぼくが、ぼくが垂れ流した汚物を、隅っこの排水溝の方に、流していた。ぼくはかすんだ目で、それを見ていた。ぼくのからだは汚れたままだった。

おじさんは一度姿を消すと、戻ってぼくの下腹に足をつつこんで、また四つん這いにさせた。からだじゅう痛くて、お尻はなんだか擦りむいたみたいにあつくて、汚れたところが気持ち悪い。

「あいッ……！」

おじさんはぼくのお尻の肉を両手でわし掴みにすると、それを左右に思いきり引っ張った。

伸ばられたお尻の穴に、冷たい風が、そして続いて、暖かい息を、感じた。おじさんが鼻先をくつつけるようにして、ぼくのお尻のにおいを嗅ぎ、股の間の、ぼくの

ちんちんを、のぞき込んでいる。恥ずかしさがまた、ぼくのからだを熱くした。

「ゲへへ……もうすっかりうんちの匂いは取れたね」  
気持ち悪い……。お尻の穴に、おじさんの脂ぎった鼻先が、軽くあたったみたいだった。

おじさんは片手で、僕のおしりを撫でながら、ひざまづいて僕の顔をのぞき込み、にやりと笑って、自分の指をべろべろなめている。これから何をするか、わからせようってことだったんだ。おじさんの顔が見えなくなるのと、お尻に、ごわごわしたものが、ぐいっと、何の遠慮もなく入ってきた。

「ああう！……ぐ……」

痛い……それになぜか、ぞくぞく鳥肌が立つ。

「うひひひ、さつきよりも随分ゆるくなったぞ……。  
どうだワン公、もう痛くないか？ 気持ちいいんじゃないのか？」

痛いに決まってるじゃないか！ 気持ちいいわけなん  
か、ないよ！ ぼくはそう叫びたいけど、もう痛めつけ  
られるのはいやだった。あのこわい目も、見たくない。

おじさんは、ぼくのお尻の中で、指をぐるぐる回して、  
指を曲げて、ぐりぐり僕のお腹の中をひっかいている。  
見えないけど、それがわかるんだ。そんなこと知りたく  
もなかったのに。苦しい。痛い。お腹がよじれるみたい  
だ。時々もう、腸には何もなければなのに、何かが漏れ  
そうな感じがして、ぞわっと鳥肌が、お尻のあたりから  
広がった。

「やめて……やめて……う……く……」

この世の中に、こんな風におもちやにされた最低の運  
命の男の子が、ぼく以外にいるだろうか。狂った男に、  
異常な世界に無理矢理引っ張り込まれて、ぼくはおもち  
やに、ペットに、犬にされて、いじめられて、遊ばれて  
いる。いつの間にかぼくは泣きすぎて鼻水を垂らしてた。

「……くあつ！」

おじさんは、やっと指を引き抜く。そして、さっきの  
ように跪き、ぼくの目の前ににやけた顔をのぞかせ、ぼ  
くのお尻につっこんでいた指を、ぼくの鼻先に突き出し  
たんだ。さっきまでお尻に入ってた指。

「さあ、なめろ」

「!……」

ぼくは目を閉じ、反射的に顔を背けた。

「こらバカ犬、こつち向け。さあこの指をなめろ」

「やだよ! ……そんな汚い……」

ぼくは怯えを感じながらも、顔を背けたままそう叫ん  
だ。変なところに入れた指なんか舐めたくない。お尻の  
穴は、まだ痛くてムズムズする。その痛みは、さっきま  
でその指が入っていたことを強調するかのようだ。

「汚いわけないだろ。犬は自分のクソだって食うし、  
尻の掃除は自分の舌でするんだ。犬なら……」

ぼくは犬じゃない！ さつと振り向いて、おじさんを見たら、ぼくは口を動かしかけたけど、その言葉を声には出せなかった。おじさんの狂ったあの目を見たからだ。

「それとも何か？ まだ浣腸が足りないのかな？」

あれは、いやだ。もういやだ。でも、でも……。

たぶん涙が、出てしまったと思う。それをこいつに見られるのも、くやしかったけど、どうしようもなかった。

ぼくは舌を出し、おじさんの指に、舌先で触れた。

何も味はしないけど、やっぱりあの、汚いものにおいが、かすかに残っている気がした。吐き気をこらえて、目を閉じて、ぼくはおじさんの指をなめる。味とかにおいとかよりも、本当はこんなことをしていること自体が、ぼくはつらくてくやしくてたまらなかった。

「ようし、いい子だぞ……。手間がかかったが、やつと尻尾をつけてやる番だ」

お尻に片手が添えられて、親指がお尻の肉を持ち上げるようにして、ぼくのお尻の穴を拡張、あの尻尾についた黒い棒が、ぼくのお尻の穴をぴったり塞ぐように、あてがわれた。冷たい。

「いつ……くっ……」

お尻の穴を硬くて冷たいものが、押し広げていく。痛い、気持ち悪い。そしてこわい。

「ほら、力抜け！」

空いた手で、ぼくのお尻がぴしゃりとぶたれた。

痛い。何か口を塞がれたみたいに、息苦しい。ゴムの棒の凹凸が、ぼくの、さんざん浣腸でいじめられて腫れているお尻の穴を、ごりごりこすっているみたいだ。

「ヒ……い……」

山なりのものが、ぐいっとぼくの中に入ると、ぼくのお尻自体がそれを吸い込んでいくかのように、ずるずると棒が、ぼくの中に突き刺さっていく。

「やあ！……痛い！ 痛い痛い痛いーッ！」

おじさんはぼくの苦しんでる顔を、のぞきこんでせせら笑った。

「お前のお尻がほしいって言ってるんだぞ。見えないだろうけど、ボクは今無理に押し込んだりしてないんだからねえ」

そんな理屈は、どうでもいいんだったら！ 痛いよ…。

「痛い……」

「そうら、根本まで入った。よく似合うよワン公」

「痛いよ……抜いて……」

おじさんは立ち上がって、また鼻で笑っている。

「自力で抜けるなら抜いてごらん。クソするつもりで力んでみたら？ 痛いだけだと思っただけだねえ」

一瞬、それをしようと思ったけど、何となく余計、奥に入り込みそうな気がしたんだ。手足は、使えない。だから、ぼくには……

「げへへへ！ これでお前の尻は……いや、お前はもうボクのものだ。これはもうボクにしか抜けないから、ボクを怒らせると一生クソも出来ないで、ベンピで死んじゃうみじめな動物なんだなお前は。げへへ、へへへ……」

ひどい……。ぼくは人間なのに。今まで普通に暮らして、何も悪いことなんかしていないのに。

おじさんはひとしきりバカ笑いすると、急に黙った。それがぼくを、また不安にさせた。無駄と知りつつ、ぼくはお尻に力を入れたりもぞもぞ腰をひねってみたりするけど、お尻の中の棒がごろごろして痛いだけで、外向けに動きそうにはなかった。

「さあ、野良から飼い犬になった証にこれをつけてあげないとな」

ぼくがもがいている間に、おじさんはまたぼくのそばに戻ってきていて、その手には、赤い革製の首輪が、握



殺風景な部屋は、薄暗がり閉ざされてしまう。四つん這いで追いつがったぼくは、鼻先で閉められたドアを見つめてがつくりとうなだれた。その姿は、飼い主に放置された犬みたいで、こっけいで惨めだった。

犬の手足を外せなかったら、二本足で立つことも、首輪を外すことも、ドアを開けることもできない。塞がれた口から、汚いものを吐き出すことも、お尻から尻尾を外すこともできない。ぼくは、ぼくはもとの家に戻れない。人間に戻れないんだ。

——どうしよう……誰か助けに来てくれるだろうか？  
父さんたちはきつと今ごろ、帰ってこないぼくを心配しているだろう。もしかしたらもう警察とかに電話しているかもしれない。……だけど、ぼくがペットショップの中で、こんな姿で監禁されているなんて、だれが想像するだろう。ここに来ることは誰にも言うてなかった。ほかに客もいなかった。……だれもぼくがここにいないこと

は知らない……もし身の代金とかを要求すれば、居場所が警察にバレるかもしれない。だけどおじさんはそんなことをする様子もなかった。お金が欲しいだけならこんなことするワケないんだ！

いかれてる。何かの映画の主人公が使ってたこの言葉が一番あてはまる気がした。あいつのしたいことが、ぼくにはわからない。いや、わかるうとするのが、とてもこわかった。

普通に暮らして居れば触れることのない、完全な絶望というものをぼくは感じていた。

「痛！」

お尻の棒が、ぼくのおなかの中を刺激する。力を抜くと、かえって自分の肛門の力で、尻尾がお尻の奥にはいつてきちやうみたいだ。そして口の中の臭い布切れ。こんな状態じゃきつと眠ることも出来ない。

「……ハッ……ハッ……」

自分の口を閉じられないから、口の中のたまった唾が、唇の端から漏れて流れている。テープで口を塞がれているから、必死で息をしなきゃ、苦しくなってしまう。：：よだれを垂らしてハアハア言っ、これじゃまるでホントに犬みたいだ……そう思ったらまた涙が出そうになった。……ちくしょう！　なんで、なんでぼくがこんな目に……。

ぼくは手を使って、もう一度尻尾を抜こうと試みた。けれど犬の手袋のせいで、尻尾があっちこっち押されるだけ。お尻が痛むだけだ。そして気づいた。何か音がする。尻尾の中になにか入っている……マラカスの中身のような、ジャラジャラしたものが。

「何かあったら、尻尾を振って知らせるんだな」

さっきのおじさんの言葉が頭の中でリフレインした。つまり、おじさん呼びたいときは腰を振ってお尻のマラカスを鳴らせということなんだ。

ぼくの心に、怒りがよみがえってきた。ふざけるな。ぼくは犬じゃない。あんな頭のおかしいやつと言うとおりになるもんか！　何とかして、逃げて、仕返ししてやりたい。

「うっ……！」

全身に力を入れたら、お尻がひどく痛んだ。惨めだった。もう疲れちゃったよ。誰か助けて……助けてよ。ぼくは冷たい床に、からだを横にし、寝そべった。尻尾が邪魔にならず、楽な姿勢が、それしかなかったから。

## 第五章 飢える犬

目が覚めた。かすんだ目の前が、少しずつはつきりしてくる。薄暗くて、かびくさくて、床は固くて、人間の住む部屋じゃない。壁紙も絨毯も、机もベッドも、何もない。シャツターのついたガレージか、物置の中みたいな部屋だった。

からだが痛い。昨日みたいにびりびり、切り裂かれるみたいなのはつきりしたのじゃないけど、じんじん、骨までネジで締めつけられてるみたいだ。お尻も、腫れぼったくて、痛みとかゆみの間みたいな、じつとしていられない気持ち悪い感じがする。

いつの間に眠ってしまったのか、ぼくはからだの横を地べたにつけて、丸くなって、膝を抱えるみたいな格好をしていて、それは確かに、ぼくが飼いたいと思っていた仔犬の眠る姿に似ていた。そんな自分が悲しかった。

口の中はベタベタを通り越して乾ききっている。一晩中押し込まれたままの臭い靴下に水分も吸い取られて、僕の喉はカラカラだった。昨日から一滴の水も飲んでいない。一度そう意識すると、もうたまらなかった。

……水が、飲みたい……。

……犬の手足も、外したい……尻尾も抜きたい……。あたいたい、歩きたい、声を出したい。お父さん、お母さん、みんなに、会いたい……逃げたい……じわっと涙が出てくるのがわかった。

くそ！何で、なんでぼくがこんな目にあわないといけないんだよ！おじさんのぼか！早く誰か助けに来てよ！……だめだ。しっかりしなくちゃ。こうして泣いていたら、助けは来ない。けど、どうしたらいいんだろう？何もかも絶望的だって、昨日、それしか結論は出なかった。



にこみあげて、ぼくの全身を血が逆流する。

「さあ、思い切りケツと尻尾を振ってごらん。犬は犬らしく、な」

ぼくは……もちろん喉もお腹も限界だったけど……それは出来なかった。反射的に、おじさんを睨み付けたんだ。

「……なんだ？ その目は……」

おじさんは低い声で短く言うと、四つん這いのぼくの下腹を思い切り蹴り上げた。

ぼくの中から一度宙に浮いて、一、三回も転がって、壁に叩きつけられた。手足が使えないから、どこもかばえない。頭を思い切り壁にぶつけた。

「また失望させたねえチビ公。まだまだ躰が足りないみたいだな……お前みたいな駄犬にやる餌も水もないぞ」

おじさんの声は暗く重く冷たく、あのニヤニヤ笑いも

含んでいなかった。おじさんはふいと一度部屋を出ると、今度は犬を一匹引き連れて戻ってきた。それは店で見た、あの大きな犬。ぼくが触らせてもらったあのハスキー犬だった。

「このライガーと一緒に暮らして、見習うといい。しっかり犬の作法を身につけるんだな」

それだけ言うと今度は本当に部屋から出てしまった。

……くそ、わかったよ！ どうせなら死んだって、お前なんかの言うことなんか聞くもんか！ ちくしょう、ちくしょう……。

ぼくはドアをにらみつけた。そしてこの部屋の新たな住人になった犬を見た。

こいつさえ、こいつさえいなければ……こんなことにならなかったのに……ほんの一瞬、そんな考えが浮かんだけど、すぐ消えた。別にこいつは悪くないんだ……ラ

イガーは穏やかで、無心、っていうのかな？ よこしまな心なんか、少しも感じられない、動物らしい澄んだ目をしていた。憎しみと怒りが、溶けていくみたいだ。ライガーと一緒に、こんな風な場所でなかったら、どんなに楽しかっただろう。

「……ライガー？……」

ぼくは、そいつの背に手を伸ばした。慣れているのか、ライガーは逃げも怯えもしない。

「……」

掌は手袋で遮られてたけど、肘とか、肌の出てる部分で優しい毛並みに触れた。ぼくは手に触れる他の生きものの暖かさに、また涙がでそうになった。けど、火のよくな怒りと憎しみが萎えてしまったあと、ぼくには泣くための体力も気力すらもうなくて……それから、ぼくは長い長い地獄の時間を味わう。

おじさんが出ていってから何時間かも経ったころ、ぼくはそれが我慢できなくなった。

渴きでも飢えでもない。おしっこが漏れそうなんだ。

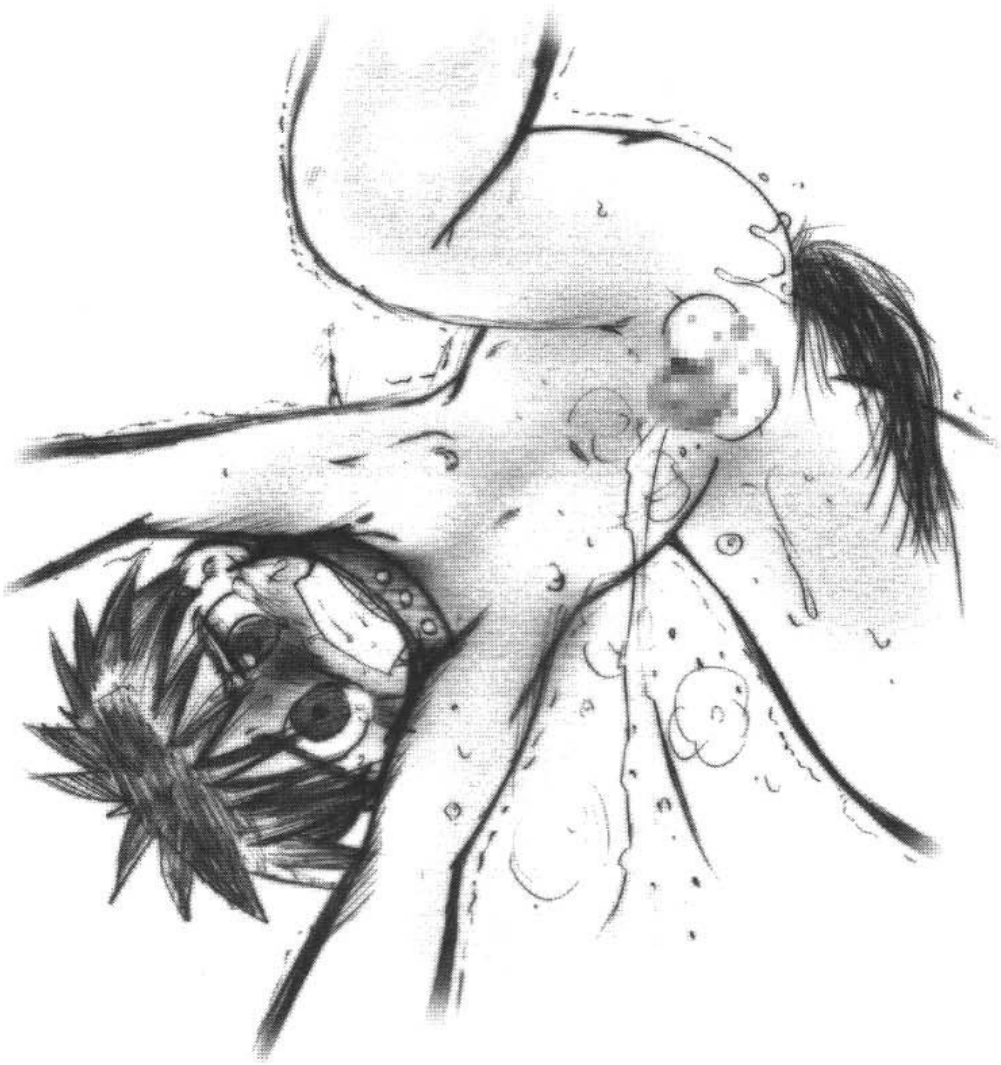
暗い部屋の隅に、トイレがあった。ただし、犬用の、トレイに砂を敷き詰めただけのものだ。

ぼくは立てない。おじさんが汚物を流した排水溝のところでしょうとしても、おしっこをまき散らしてしまうだろう。けれど犬用のトイレにしゃがむのも、耐えられない屈辱だった。

「……う、くっ……」

漏れる……！ ちんちんのつけ根がちぎれるように痛い。

……我慢の限界だった。漏らすよりましだ。誰も見えないもん。だから、だから……！



ぼくは急いで部屋の隅まで四つん這いで走ると、その犬用のトイレに、赤ちゃんのハイハイの姿勢で跨がった。

「ふ！……くっ……あああー！」

ぼくのちんちんから噴き出た黄色いおしっこが跳ねて、ぼくのまたの間やお腹にもかかって、砂に吸い込まれていく。あ、ああ、苦しさがゆるんで、溶けていく。

「っハアツ……！」

おしっこの時お尻に力を入れたせいで、尻尾がぐつと中に入ってきた。ぼくは小さな悲鳴をあげた。

苦痛が抜けて、おしっここのあとの気持ちよさが、じわっと押し寄せ、消えていくと、みじめさと恥ずかしさにぼくは、またひどく傷ついた。

ああ……ぼくは、ぼくは……こんな格好で、こんなところでおしっこをして、気持ちよくて声を出した。ぼくはもう……いや、だめだ！ 考えるな!! 何もかもぼくのせいじゃない。あいつのせいだ。けどぼくは、今まと

もな人間なんだろうか。そう思ってもらえるだろうか、もし今ぼくが、助けられたら。

「ウ……うう……ううう……」

涙なんかもう出ないと思ったのに……犬用便器に跨ってまだおしっこ垂れ流し続けながら、ぼくは泣いていた。

もうぼくはおかしくなりそうで、そうなった方が楽じゃないかとか、思い始めていた。

そして渴きの限界が訪れる。

「……ハア……ハア……」

本気で、死にそうだった。口の中はまるで地面で擦りむいたかのようにヒリヒリして、舌がペタとくつついてしまう。口から息を吸うと、ホコリが喉に貼りついてせきこんでしまう。口の中を中心に、全身が焼けつくみたいに苦しい。都会の真ん中なのに、ぼくは砂漠に独りぼつちで放り出されたみたい、苦しみをだえていた。

何か飲みたい……水……みず……おなかいっぱい、水……そんなぼくに構う様子もなく、ライガーはさつき自分が使ったトイレに行儀よく跨ると、じゃーっとおしっこをした。

それを見て一瞬でも「飲みたい」と思ってしまふほど、ぼくは渴いていた。喉も、心も。

叩かれた痛さは時間が経てばましになっていくんだろうけど、喉の渴きは、延々休まずぼくを苦しめ続けた。地獄だった。眠りたい、思い切り殴られて気絶してもいい。今に比べれば、どんなに楽だろう。

水……水、水、水、水水水みずみずみず……！  
だれでも、なんでもいいから……飲ませて、のませてよお……！喉が痛い。ベロが口の中にひつつく。アイス、カキ氷、コーラ……そんな贅沢言わない。水……みず……おねがい……。犬の手で喉をかきむしって、そう祈っていた、そのとき。

おじさんが扉を開けて入ってきた。入ってきてくれたんだ。手には……ボール一杯の水を持って……。

「……」

足の痛いのも構わず、ぼくは二本足立ちになって、おじさんに飛びついて、すがりつこうとしていた。さんざん放置された犬の姿にそっくりだった。その時は、そんなこと考える余裕なんて、なかったけど。

けどおじさんは、飛びついたぼくを邪険に払いのけ、冷たく言った。

「勘違いするな。これはライガーのなんだよな」

そう言って、おじさんはライガー、と優しく呼んで、一言命令した。

「お手」

ライガーはしつけられた通り、飼い主の差し出す手の平に自身の手を重ねた。

「よしよし、いい子だねえ」

ライガーの頭を軽く撫でると、おじさんは水をライガーの前に置く。ライガーは舌を出し、ぴちゃぴちゃ水音をさせて水を飲み始める。水が減っていく。こぼれて床に浸みこんでしまう。なくなってしまう。

「ははは、そんなに喉が乾いてたんだな。よしよし、うまいか オマエはいい子だなあ」

……おじさんはこっちを見向きもしなかった。……ぼくは、ぼくはこんなに、こんなに苦しんでいるのに。

「アー！ アアアー！」

大きい声をあげても、おじさんは軽蔑的にぼくをちらつと見て、ただ言い捨てるだけだった。

「唸るな。全くうるさい駄犬なんだな」

おじさんのイヤらしい目つき……それが、ぼくに何を求めているのか、どうしたらいいのか。わかりかけてきていた。おじさんがぼくに求めることは。

イでも、ヤだ、イヤだイヤだ！ ぼくはイヤだった。

こいつのいいなりになんか……。そんなことするなら死んだほうがマシだ、ぼくは犬になんか絶対ならない！でもこの苦しみに、あとどれだけ耐えたらいいんだろう。

ほんの数センチ向こうで、ライガーが美味しそうに水を飲んでいる。ピチャピチャ音をたてて、嬉しそうに尾を振って……。ぼくが、人間のぼくがこんなに苦しんでいるのに、犬が、犬は幸せそうに、かわいがってもらって……。

ぼくも犬になれば……。助かるのかな？

気絶できない。死ねないんだ、苦しいんだ、ずっと続くんだ。こいつみたい……。尻を、尻尾を振るだけでぼくは……。たすかるんだ……。にんげんじゃなくなれば……。そんなのだめだ……。ぼくはにんげん……。しねない……。くるしい……。犬、いぬ……。ぼくは……。らくになりたい……。どうでもいい……。

チリ……。ン、チリリン……

尻尾の中に埋め込まれた鈴が音を鳴らした。

「おっ……！」

おじさんは小さくうれしそうな声をあげた。

ぼくは四つん這いのまま、おしりをつきあげ、腰を振った。おしりの中の棒が、左右に揺れて中が、痛かった。

「うううっ……。く……。ッ！」

ぼくは自分から、尻尾を振った。ぼくは自分から、犬になった。みず……。くやしい、おじさんが憎たらしい。……。みず……。は、や、く……。

チリーン、チリリーン……。

ぼくはお尻を振り続ける。淫らな笑顔で見下ろすおじさんの目を、たぶん情けないお願いの目で見ているんだ。

……尻尾を振るとフサフサの毛がお尻と玉をくすぐつて。じわじわと気持ちよくて、ちんちんが少しかたくなつてしまった。

ぼくがしてることは、普通の人間ならしないことだよ。ぼくは……もう……。くやしいよ……。どうして……。恥ずかしいよ……。もとの普通の暮らしにぼくはもう……。どこかに、逃げたい。誰もいないところに。

胸が苦しい。もう……。助けて……。イヤだよお……。み、ず……。おじさん、おねがい……

ぼくは尻をふり続けた。自動的に動くぜんまい仕掛けのおもちやみたいに。

「ようし、少しは素直になつたじゃないか、チビ公」  
おじさんはやつとぼくの方にやって来てくれた。

「これで解つたか？ 幾ら抵抗したって苦しみがぐだけで結局飼い主であるボクのいうことを聞くしかないのさ。ペットはな、飼い主がいなければ生きていくこと

さえ出来ない。お前がかわいいと言っていた犬の気持ち、わかったかい？ 一生つながれて、首輪をされて生きて、死んでいく犬の気持ちが……。犬っていうのはそういう悲しい生きものなんだよ」

おじさんは更に続けた。ぼくのみずは？

「お前は生まれつきの犬だ。それが今、わかつただろ？ それがお前の本性だ。だがライガーを見る。犬には犬の喜びがある。……。チビ、お前にそれを教えてやろう。ボクが飼い主として、じっくり調教して、よい犬に育ててあげる。一生責任持つて、飼い殺しにしてあげるからね」  
ぼくはなにもこたえられなかった。かんがえもすすまなかった。ただやけにぼんやりした、だけどげんじつ。

ぼくの犬小屋の中には、ただぼくのお尻が鳴らす、淫らな音色だけが響きつづけていた。

## 第六章 芸をする犬

たつぷり一日半ぶりに、口のガムテープを剥がしてもらえたぼくは、口の内側に貼りついた布の塊を、痺れた舌で押して、ようやく吐き出した。

「ぶはっ！」

よだれまみれの、丸くかたまつた靴下が床に落ちると、すごい臭いに吐き気がした。今の今まで自分の口に入っていたものなのに。

「ハア……ハア……」

ぼくは訴える視線でおじさんを見あげる。

「み……水……」

ただおじさんはただぼくをじっと見ているだけだった。

「は、はやく……」

「まだだ」

おじさんの冷たい一言。

「な……!?!」

「お前も見ただろう？ ライガーは水を貰う前に何をした？」

少しにやつくおじさんの歯が見えた。

「え……?」

ぼくの頭は回らない。水……。

「まだまだ駄犬といえど、お手くらいできるだろう？」

おじさんはしゃがんで、右手をぼくの目の前にすっと出した。さつきライガーにしたみたいに。

ぼくは犬じゃない。けどこの人は、ぼくをどこまでも犬扱いしないと、気が済まないんだ。頭がおかしいこの人に、ぼくは裸にされ、四つん這いにされ、尻尾を、お尻に、入れられて……手足もこんなにされて、今度はお手……。これまでにされたことからすれば、大したことないかもしれないけど、ぼくはくやしかった。自分から

それをしなきゃいけないってことが。

でも苦しいんだ。ぼくは死にたくないんだ。まだ、もしかしたらのぞみがあるかも知れないもん。人間に、戻れるチャンスが、あるかも知れない。いや今だってぼくは、ぼくは……。

ぼくはおじさんの手に自分の手を重ねた。

「よーしよし。いい子だねえ。へへ」

おじさんはぼくの頭を撫でた。目は、ぼくを小馬鹿にしているように思えた。頭撫でられてほめられるなんて、正面切ってバカにされるよりよっぽど屈辱だって、ぼくはその時初めてわかった。

「さーて、じゃ、今、水を汲んでやろうなあ、チビ」

おじさんはやっとそう言ってくれた。水……。

「……なあ、チビ。マーキングって知ってるか？」

まだ何かあるっていうのか!? ぼくが苦しんでるの

を知っていて、なぶっている。

「マーキン……?」

「犬はいつも電柱に小便引っかけてるだろ? あれは自分の臭い匂いをつけて、自分のなわばりに印をつけてるんだ。……お前はまだ、自分が犬で、ボクの持ちものだってことを《からだで》わかっていないみたいだからね……からだの中からマーキングしてやろうな」

何のことかさっぱりわからない。何を楽しそうにしゃべってるんだよう。水、ぼくの水……。

けど次の瞬間、いやでもぼくには意味がわかった。おじさんの、狂った意図が。

おじさんはライガールの飲みかけの水を持ち上げ、ぼくの目の前に置くと、自分のズボンのジッパーを下ろし……見たこともない、気持ち悪い毛に覆われた肉の塊を取り出して……指でそれをつまみ、腰をつきだして……じよぼじよぼって、黄色い濁ったおしっこを、ボウルの水

に、おいしそうな水に、注ぎ込んだ。

まわりに水滴をこぼしながら、おしっこが注がれたボールの水は、濁った黄色に染まっていく。泡立ったレモンウォーターみたいだ。

「さあ、飲め。喉が乾いているんだろう？」

ボールをぼくの方にずいと押しつけ、おじさんはぼくの目を見る。

犬の飲みかけの、こんな狂った人の、おしっこが混ざった水。普通の人間なら、絶対に口にできるものじゃない。人間、なら。

けれどぼくの舌は、どこの犬でもしているように、だらんと口から出ている、本能的に、からだに、必要なものを、激しく、ほしがっていた。

「げへへ、そんなに飲みたいか、犬め。ゲへへ！ チビ、もの欲しそうなお前、なかなかかわいいぞ」

おいしそうに見える。おしっこの臭いなんて、普通嗅

ぎたくなんかははずなのに、それでも惹きつけられた。

ぼくはおじさんのおしっこがのみたくてしかたがない。だめだ、ぼくはおかしい。ぼくもおかしい。

「ほら、もう飲んでいいぞ、チビ」

ためらうぼく。だけど……

「いらぬなら捨てるぞ？」

そう言われた瞬間ぼくはボールの中に頭をつっこんで、黄色い水をすすった……。ごくごくと喉を鳴らし、ぼくはボールの中の、生ぬるい液体を飲み込む。乾ききってひりついていた舌や、口の中の皮の痛みが、やわらいでいった。

「ハハハ。そんなにがつつかなくでも、おかわりもあるぞ。げへ、げへへへ！」

ボールに口をつけているぼくの頭の上から、黄色い雨が、降り注いだ。おじさんが、汚いちんちんを振って、ぼくの頭におしっこを降りかけている。



ぼくの今のこの姿を見て、果たして何人の人が、人間だと、思ってくれるんだろう。犬でも人間でもない動物。どちらかと言えば、もう、ぼくは。

尻尾をつけて、芸をして、汚い水だって構わず飲んじやうぼくは、人間の子どもに見えないのかもしれない。

「どうだ、チビ公。うまかっただろうか？」

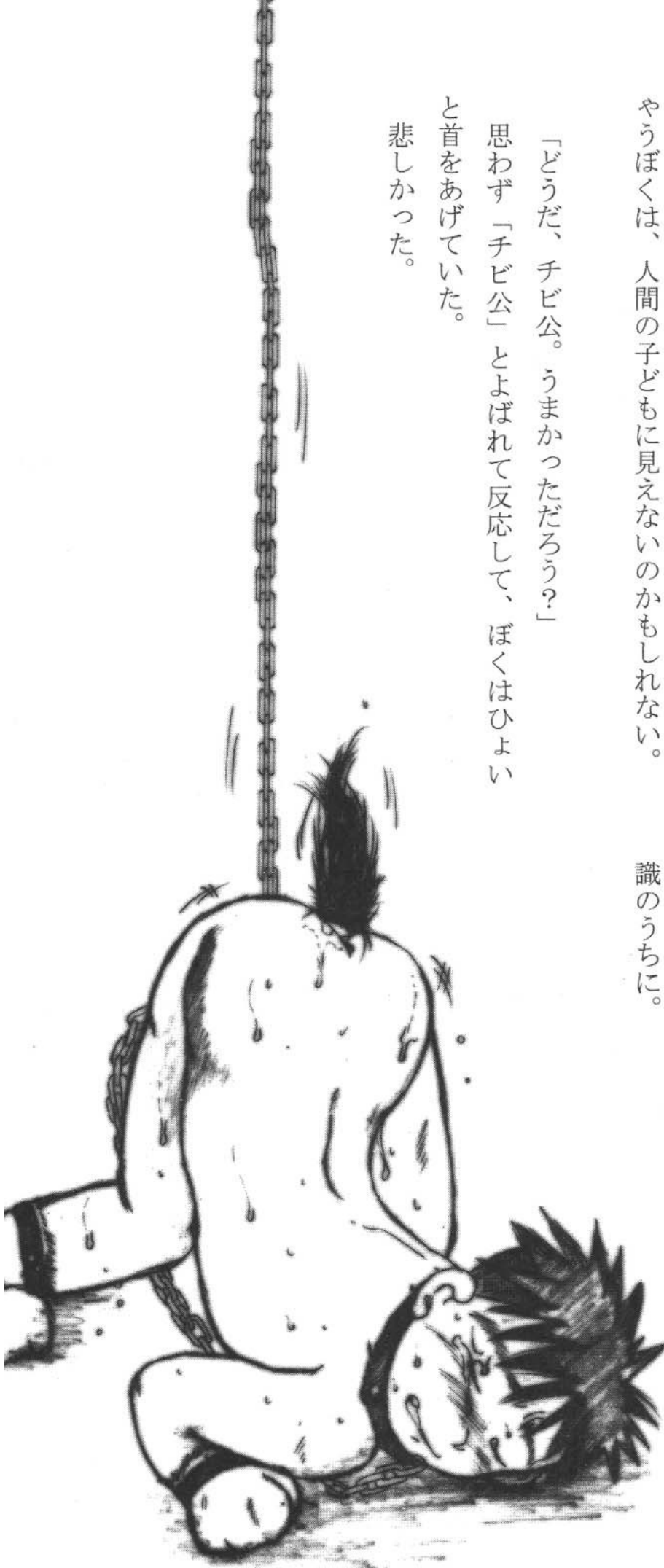
思わず「チビ公」とよばれて反応して、ぼくはひよいと首をあげていた。

悲しかった。

「また飲みたいだろ……？ なあ……」

答えることは……出来なかった。

ただ、お尻を高くあげて、尻尾を、振っていた。無意識のうちに。



第七章 てなずけられる犬

おしっこ入りの水をすべて飲みきると、今度は「餌」をもらえた。

……エサ皿いっぱい……ドッグフード。ビスケットに似てるけど、へんなにおいのする固まり。それもまた、四つん這いでぼくは、頭をエサ皿につっこむようにして、食べた。

……おなかもすごく空いていたし、きっとそれ以外に何ももらえないことも、いい加減学習していたから。だけど、初めて口にする犬の餌はとても油臭くて、ざらざらしてとても食べにくかった。吐き気はするし、水は欲しくなるし、3分の1くらい残したらお尻を何発もひっぱたかれた。赤く腫れ上がるくらいに。

「真っ赤なケツを晒した出来損ないの犬め！ まるで猿みたいだな。出来損ないの、猿だ。げへ、げへへ！」

おじさんはそれだけ言い捨てると、扉の向こうに消えていってしまった。

汚臭の残る部屋には、ぼくとライガーだけが残された。そして、それから本格的に、ぼくの奴隷犬生活が始まる。

二日目の朝早く、ぼくは目が覚めた途端、お尻を激しく振っておじさんと呼んだ。

餌でも水でもなく、うんちがしたかったんだ。だけど、ぼくのお尻は栓をされてしまっているから、どんなに恥ずかしくても、くやしくてもこうするしかない。ぼくはおじさんと呼んだ。尻尾を外してもらうために。

おじさんはわざとらしく、ゆっくりとした足取りでやって来た。

「どうした？ チビ公」

と訊くので、ぼくは自分から言うしかない。

「……し……しっぽを、はずして、ください……」

「アン？ なんでだ？」

「あ……う、んち……したくて……おねがい……」

「お、なんだ、糞したいのかおまえ？」

嘲笑まじりでおじさんは言った。

「そ、そうです……！」

「そうか。だがな、それじゃだめだなあ。これからは糞をしたいときはな、『どうかクソ犬のチビにうんこをお許しください、ご主人様』としっかり頼め。わかったか？」

うう……！ ぼくは視界がぐらぐらするのを感じた。

恥ずかしさだけじゃない、怒りで思わず睨みつけたくなつたのも確かだ。けどお腹が……。苦しい。

「よし、じゃあケツ向けろ。お前の尻尾を抜いてやるからな」

許しを得たぼくは、急いでおじさんにお尻を向け、きゅつと上げる。まるで躊躇しないぼくの様子におじさんはぼくを笑う。

……ちくしょう！ 考えるな！ 考えるな！ 悔しいとかおもうな！ 考えるな!! 生きるため、そうだよ。仕方ないから。……泣きたくなるほどの情けなさをぼくは必死でこらえる。

「うあうつ!!……あ……」

おじさんが尻尾を抜くと、力も入れてないのにうんちがお尻からぼとぼと垂れ落ちてしまった。きつと肛門の周りが、ずっと尻尾を挿されて開いたままで、麻痺してしまっているせいだ。ぼくは、うんちも自分でできない、がまんもできないからだに、つくりかえられてしまった……絶望的な気持ちと、悔しさが、こみ上げる。

犬用トイレの上に、うんちをあとからあとから、こぼして、ぼくはからだを、震わせた。

「げへへ、ケツの周りがひくひくうずいているぞ。気持ちよさそうだなチビ公。すつきりしたかチビ公？ げ

へ、げへへへ！」

ひどい嘲りの、その言葉にたまらずぼくは涙をこぼした。

お尻を拭かれ、ぼくは尻尾を再びはめられる。

そのときぼくは、おじさんが妙なことをしているのに気づいた。おじさんが尻尾をぼくに入れる前に、オイルかなにか、ぬるぬるした得体のしれない液体を、ぼくのお尻の中に塗ったんだ。ぼくはなんとなく恐ろしくなつて、それが何か訊きたかったけど、訊いたところでまともな答えが返ってくるとも思えなかったので、言葉を飲み込んだ。液体がおなかの中の柔らかい部分に染み込む。その液体の正体はこれからずっとあとに知ることになる。身をもって。

この日は、あとは、何ごともなくすぎていった。餌と水は相変わらずの内容だったけど。

三日目も、ぼくはまずはお尻をふつて尻尾をはずしてもらった。昨日言われたセリフも、すっかり言ったつもりだったけど、声が小さいと叱られて、お尻に六発も、お仕置きの鞭を打たれた。

犬のおいというのは、狭い部屋中ですつと嗅いでいると、とてもきついつて、最初の夜にライガーと一緒に居たとき感じたはずだけど、気がつくとも何も感じなくなっていた。今のぼくはきつと、普通の人が近づいたら犬のにおいがするんだろう。エサだつて同じなんだから。

今日はエサの前に「おすわり」をするように命じられた。ぼくのおすわりはライガーとはちよつと違って……体育座りみたいにお尻をつけたあと、お尻を上げて、股を広げて尻尾がはまってひろがったお尻の穴を、おじさ

んにしつかりみてもらわなくちゃいけない。

「……チビ公の尻尾を……ど……どうぞご覧になって、  
ください、い……ご、ごしゅじん……さま……！」

これも言えと命令されたセリフだった。もうお尻を殴られるのがイヤで、ぼくは精一杯、大きな声を張り上げた。腰も振って、尻尾をフリフリ振る。おちんちんと玉も、それにつられてブラブラ情けなく揺れる。

ニヤニヤしながら、おじさんはぼくのお尻の穴をじつと観察すると、やつとエサと水をくれた。

水の中のおしっこが、昨日より濃くなってる気がしたけど、なにも言えなかった。

四日目の朝、ぼくはお漏らしをしてしまった……。

トイレを片付けられたあとに、急におしっこがしたくなって、一生懸命、恥ずかしかったのに、ガマンして尻尾を振ったのに、おじさんは来てくれなくて、おしっこ

がもうガマンできなくて……床の上に漏らしちゃったんだ。

おじさんに見られたら絶対怒られる！ そう思ったから、ぼくは……じ、じぶんで、ゆかの、おしっこを……からだになすりつけた。だけど拭いきれなくて、仕方がないから……床を、おしっこを、なめて……なめとろうと、した。殴られた上に、それよりひどいこと、させられるきつと……それが、こわかったから、だから……。

だけど床をなめている最中に、いつの間にかおじさんはぼくの後ろに立っていた。冷たい目で、口元にいやな笑みを浮かべて。そしてぼくはおしおきされた。お尻に30発、ちんちんに50発、数え上げさせられて、細かい鞭で叩かれて、その上、

「お前みたいなシヨンベンたれの駄犬には、チンコにも栓が必要らしいな」

と言われて、おじさんはぐったりして動けないぼくの

ちんちんを、潰れるくらいの力で掴むと、ちんちんの先に細い棒を突き刺した！

「イタイツ！」

仰け反るぼくを押さえて深くまで差し込もうとする。

「動くとかガするぞ。ちんこが血だらけになってもいいのか？」

「いたい！ やめてーッ！」

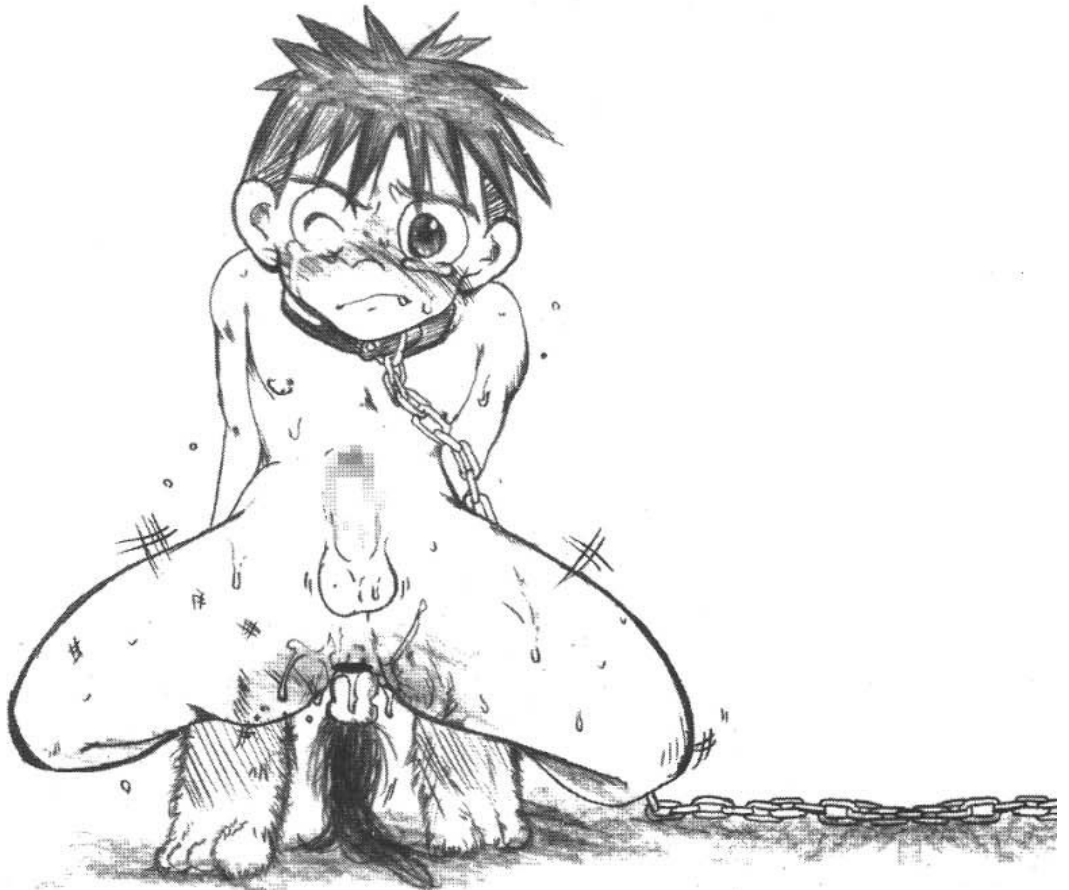
「うるさい。じっとしてろというのに」

両腕の間からのぞくと、ぼくのちんちんには、ただの棒じゃなく小さな旗が挿し込まれていた。旗の布のところには「おもらし犬」と書かれていた。

「小便垂れ犬によくお似合いだ。これからは糞と一緒におしっこをする許しも得るんだぞ。げへへ、へ」

その日は、餌も水も貰えなかった。

空腹と、ちんちんの痛みと悔しさに、ぼくは一晩中泣いた。



五日目はおじさんに「ちんちん」をするよう命令された。

逆らっても、叩かれるだけ。エサや水を抜かれるだけだから。

ぼくは言われるままに、膝を付き、足を広げ、腰を突き出した。おじさんが腰を振れと言うのでぼくは一生懸命お尻を左右に振った。ちんちんの旗がひらひら揺れて、お尻からは鈴の音が鳴る。その滑稽さをおじさんはあざ笑い、ぼくは……ぼくは、なんだかも悔しささえ感じなくて……だって恥ずかしいとか悔しいなんて気持ちはない、感じるとすごいつらい、叩かれて痛いより、つらいから、だから……だから、おじさんが自分のちんちんを出して、くわえて直接おしっこを飲めと命令したときも、ぼくは抵抗しないですぐにちんちんを口にいられたんだ……初めて舐める、大きなちんちんの、むっとするにおいとか、苦いような塩辛いような変な味に、涙も出て、吐きそう

になったけど……何も考えないように、できるだけ何も感じないようにして、舌を動かした。自分の不幸も不運も……自分がホントは人間なのについていう思いも……なにもかも、もう忘れたかった。そうじゃないと苦しくて苦しくてもう、気がおかしくなりそうだったから。

毎日毎日ぼくは犬としていろいろなことを仕込まれた。三遍回ってワンは何度もお尻を鞭でぶたれてやっと出来るようになった。自分のおしっこだって飲まされたし……ライガーと顔を舐め合うのは、もう朝の日課だ。

お尻のしつぽは、どんどん太くなっていった。尻尾が替えられるたび、あの謎の液体も塗られる。今お尻に刺さっているのは空き缶くらいの太さで、リモコンでブルブル震えるようになっていた。ぼくがおじさんの言うことをちゃんと聞いたらご褒美にスイッチを入れてくれる。その振動はとても辛くて、痛いけど……同時になんだか

お尻の中が温くなるような、変な気分になる。

逆に、ぼくが命令を聞かないと、鞭やスタンガン、焼き鑊とかでお仕置される。体中、小さな傷や火傷だらけだ。……そうやって毎日毎日、まるで本物の犬のようにぼくは躰……いや、調教されていた。……今が何曜日なのか、もうわからない。ただただ、日は経っていくけど、だれも助けにきてくれないし、おじさんもぼくを家に帰す気があるように見えない。終わりの見えない生き地獄だった。

「……お願い……ぼくを、うちに、帰してください……」

ある日、たまらなくなつてぼくは、おじさんに泣きついた。

おじさんは……しばらく、ちよつとうつむいて、なにかを考える仕草をしたあと、こう言った。

「げへげへ……なんか言ったかあ？ 悪いけど犬語はちよつと、わからなくてねえ、ボクには。

それよりおしっこしたくなつたなあ……ほら、チビ公。おしっこだよ、小便！ ……口を開けろ」

そして——今日もぼくの、犬の一日が始まる。

第八章 散歩に行く犬

「そろそろだな」

ぼくが餌を食べている最中おじさんが言ったその一言がはじまりだった。

いったい何がそろそろなのか、気になったけれど……なんだか、変な予感がして聞けなかった。

その日の夜。

「起きろ、チビ公！」

いつものように、部屋の隅でうずくまって寝ていたぼくを、おじさんが突然たたき起こした。

時間になると……たぶん日付も変わって間もない真夜中だと思う。そんな時間におじさんが来たのは初めてだった。ぼくは眠気を追い払うのに必死な状態だったけど、同時にすごく不安になった。

……一体……どうしたんだろう……

「たまには散歩に連れて行ってやろうと思っただけ」

おじさんはそう言うと、銀色の太いリードを持ってきた。ぼくの首輪に取り付ける気だろうか。

「さ……んぼ……？」

初めてみるリードに気がいって、意味がわかるのにずいぶん時間がかかった。けど……

「ああ。ライガーと一緒に連れて行ってやる。犬らしくお外を四つん這いで散歩だ」

……一気に入くは目が醒めた。

願ってもないチャンスだ！

こんな格好のまま外に行くなんて、恥ずかしくてイヤだけど……だけど、一歩でも外にでられるなら……誰かが、助けてくれるかもしれない！ だれかに見つけてもらえなくても……隙を見て逃げられるかもしれない！ ぼくの胸は高鳴った。

「よし、これは邪魔だからはずしていくからな」

そう言うとおじさんは、なんと、拘束具となっていた手足の着ぐるみを、はずしてくれた。鎖も外されて、ぼくの手足は何週間ぶりに繋ぎとめるものを失くした。久々の手足のすっきりした感触にぼくは喜びを感じるはずだった。

…なのに……。

「っ……ああああ!!」

二本足で立ち上がろうとした途端、膝に急激な痛みが走ったんだ。

「痛ッ……ああ……!!」

関節が……かたまつて……まっすぐ伸ばせない!? 今度は腕を伸ばそうとしてみる。でも、痛い。肘と膝が、曲がらなくちゃいけない部分で軋んで、動かせない……

「どうしたんだ? 人間のマネでもしようと思ったのか? 痛いだけだろ? チビ公」

もう何日になるだろう、ぼくは四六時中四つん這い生活を強制されていた。そのせいで、……。骨折で入院していた人が、骨が繋がっても、簡単には、手足が動かさないように、僕の手足の関節は、伸ばすことができなくなっていた。

二本足で歩けない……! 拘束具を外されても。自由になっても、意味がない。たった一ヶ月足らずでこんな風になって、もしも、もしもこれ以上このままの生活を強いられたら、二度と、二度とぼくは……。

そんな、そんな……ぼくは思い切ってもう一回足を伸ばした、けど……

「イタッ……!!」

無駄だった。

「ほらほら、無理しないで四つん這いになりな、犬は犬らしく。げへへ、立ち上がるのはチンチンをするときだけでいいぞ。げへへへ、へへへ!」

おじさんは下品につばをとばして笑った。

……餌のしつけ、トイレのしつけ、芸のしつけ……ついに、二本足で歩くことまで、ぼくは奪われてしまった。

ぼくは、さらに追い討ちをかけられる。

おじさんがもちだしたリード……犬用の紐は、ぼくの知っている形じゃなかった。

首輪につなぐ金具があるべきところに、そんな金具よりもずっと大きな、太めのリングがついていた。リードの掴む部分……おじさんが持っているその部分は、金属製の重々しいつくりで、おもちゃのマジックハンドのごついやつみたいだ。

「これは首につける紐じゃない。お前のためにつくった、特注のリードなんだよ」

静かに独り言のようにそう言うと、おじさんは、リングになっっているほうを、ぼくのちんちんの玉にはめこんだのだった。

「これで、この取っ手を握ると、だ」

おじさんはもち手の部分をぎゅっと握った。

ツツツ!!!

「ツツグイギやああああああああ!!!」

ぼくは、はらわたを抉られるような激痛に、悶え叫んだ。玉に取り付けられたリングが、ぼくの金玉を潰すように締めつけている！まるで孫悟空の頭の輪っかのようだ。

「痛い！ いたい！ 潰れる—————ツ!!!」

うあああああ!!」

ぼくが泣き叫ぶのを、ちよつとの時間楽しんで、おじさんはにぎりを持つ手を緩めた。

「……ア……は、あ……」

涙も出ない。苦しすぎて、声も出ない。冷や汗だけが、全身をタラリと濡らして、ぼくの体を冷たくした。リングは冷たく、無情にぼくの金玉に食い込んだままだ。

「初めて使ってみただけど、なかなかの秀作だねえこのリードは。これさえつけていれば、お前が粗相をしたときにもすぐにお仕置きできる。今のでもな、半分も力をいれてないんだよ。……目一杯握ったら、お前のキンタマは、潰れてぐちゃぐちゃになる。そしたらメス犬に生まれ変われるな。……まあタマタマ潰されても生きていればの話だけだな。ボクは医者じゃないからねえ。ゲへ、ゲへへへ。……散歩の最中にはぐれないようにずっとこのリードをつけておくからな」

むごいことを、楽しそうにしゃべるおじさん。慣れたはずだけど、憎たらしい、こわい……そして、わずかも希望を持った自分がバカだって悟らされた。

「オラ！ とつとつと四つん這いになるんだよ。またタマキンやられたいのか……？」

おじさんが手を握りそうな仕草をする。ぼくは反射的に、四つん這いの体勢になった。怯えて、おじさんの顔

をうかがいながら。

「そうそう。言うことをよくきくいい犬なんだな、お前は」

涙にぬれた視界の先に、おじさんの歪んだ凶悪な笑顔が見えた。

店の裏口からまずおじさんが出る。そのおじさんに引かれて、ライガーと……ぼくが、四つ足で、並んで外にでた。

……ひさしぶりの外の景色と空気だ。星を見たのも、風を浴びるのも久しぶり。四つん這いで見るその景色は、馴染んだ光景のはずなのに、初めて見る景色のようだった。空が、高い。遠くには車の走る音が聞こえる。

「さつ、五丁目公園まで歩くぞ、2匹とも」

おじさんは愉快そうな口ぶりで言った。ちんちんのリードを引っ張られて、ぼくも歩かざるを得ない。

五丁目公園……ここから10分もあればいける公園だ。よく学校の帰り友達といっしょにキックベースやサッカーをやった。確かによく犬を連れておばさんとかも散歩に来ていたけど……。まさか、自分がこんな姿で行くことになるなんて、思いもしなかった。

ライガーが急ぎ足で歩く。ぼくも慣れないアスファルト道を、膝と手のひらを使って歩いた。膝はすぐに擦り剥けて、痛くなる。

……こんな風に、犬と同じ視線で、同じようにつながれて歩いていると、もう自分が人間だったなんて、忘れてしまいうさだだった。ぼくは犬。むしろ、ライガーに比べれば、できそこないの、犬だ。

……ちがう、違う！　ぼくは頭を振る。……どんなに酷い仕打ちを受けたって……ぼくは人間なんだ！　ぼくが知っているじゃないか、ぼくが覚えているじゃないか。……ぼくが、忘れてしまったら……。

ぼくの考えを遮るように、突然ライガーが歩みを止めた。そして腰を丸め、身を震わせだした。

ライガーが、ぼくの目の前でぼとぼと、糞をしたのだ。

「あっちゃー、しまったなあ。袋持ってくるの忘れちゃったなあ」

リードを握るおじさんが、後ろで、わざとらしくいった。……わざとらしく。ぼくに聞こえるように。…嘘だ。

まだおじさんは何も言ってない。だけど次の言葉はあまりにも容易に想像できた。

「さあて、どうしようかなあ。ペット屋がこんなところに糞を放置じゃ、マナーに反するよなあ」

いやな予感にお腹が重くなる。やめて、おじさん、それだけはやだよ。お願いだから。

「チビ公？」  
いやだ。そんなことできない。

「チビ公。ライガーのうんこをくわえな」

一気に涙が出た。そんなのやだ、やだ、絶対できない！  
やだ、やだ、お願い。ぼくが取り乱したのが分かっているのだろう。そう、このおじさんはきつと全部わかってるんだ。

全部わかってて…それで、ぼくに笑顔を見せる。

「食べるとは言ってないぞ。公園までいったらゴミ箱があるからくわえてそこまで運べ！」

おじさんはぼくの頭をぐいっと押した。

「うっ……！げほっ……！」

目の前に犬の糞がある。汚い、汚い糞。さつきライガーが出したばかりの。

反射的に顔をそむけた。地面に頬がつくほど、頭を押されても。

「何してる？早くしろ」

「ご、ごめんなさい…できない、できないよ…！お願い、

おじさん許して…」

こんなもの！手で触るのだっていやなのに……まして、口なんか……絶対……！

「ギャアアアツ！！！！」

キンタマに圧力がかかった。

「くわえろ、チビ公」

低い冷たい声。でも……絶対イヤだ！イヤだ！で

きるわけ……！

「くわえろ」

イヤだ！痛い！苦しい！やめ、て……ちんちん

潰れちゃう……しぬ……

やだ……死にたくない……もう………！！

「んっ………！！」

ぼくは……目の前の茶色いコロコロしたかたまりに、

這うように近づいて、口に……

「ちゃんときれいに、全部もっていくんだぞ」

口の中に例えようなない味と匂い、そして生暖かさが伝わる。

唾が口の中に溜まる。それが鼻やら口端やらからこぼれた。臭気に、涙もにじむ。耐えられないような吐き気。ぼくは今、口の中にこんな汚いものを：おしっこよりも汚いものを：

いっそ吐くか、飲み込むかしたい。だけどそのどっちも許されない。

「ようし。ほれ、グズグズするな。行くぞっ！」

リードを引かれて、ぼくは進むしかなかった。

口いっぱい犬の糞を頬張りながら。途中で何度か吐き出してしまい、ぼくは折檻された後、何度もそれを口の中に戻された。

再び、ぼくたちは公園に向かって進んだ。夜風が素肌に染みてとても寒い。……この季節、普通の人間なら裸で外を歩くことなんてない。秋の外気がこんなに冷たいなんてぼくは知らなかった。剥きだしの尻が小さく震える。でもそれより、口の中の臭い味が気になって仕方ない。

そのときだ。

カツン、カツン……

前の方から足音が聞こえた。

誰か来る！ ぼくは思わず駆け出しそうになる。

「ツンああ！」

その途端、万力がぼくのちんちんの玉を締めつけた。

「隠れる」

痛みでうずくまるぼくに、おじさんは言い放った。不

気味に落ち着いて、低く、鋭い声だった。

「隠れるといつてるんだ、チビ公」

「がひ！ が……ギイアツ!!」

ミシミシと金玉が軋む音が聞こえるようだ。そして無理矢理ひっぱられて袋の皮が千切れそうになる。

「……キンタマつぶされたいのか？ え？ こんなすっ裸でケツ穴に尻尾突っ込まれて、クソくわえてノタレ死ぬか。……ええ！ クソ犬!？」

おじさんがレバーをさらに握りこもうとするのを見て、ぼくはもう、逆らえなかった。お腹を抉る痛みと、こんな格好で死んで、お父さんやお母さんや、たくさんの人に見られているぼく自身を想像したら、逆らえるわけなんて……

ぼくはおじさんに引かれるまま、細い横道に入った。

思えば、なぜこのときぼくは逃げ出さなかったんだろう。

例えどんな結果になったって、ここで逃げていれば、あんなことにはならなかったのに……

「よし、行った。もういいぞ」

横道から顔だけ出して、辺りをうかがい、もう人の気配がないことを確かめると、ぼくのリードを軽く引き、おじさんは合図した。

「……よくいうことを聞いたねえ、えらいぞ。チビ公」

「ッあぁう!!」

突然尻尾のバイブのスイッチが入れられた。

「ご褒美にこのまま公園まで連れて行ってやるからな。うれしいかチビ公。へへ、へ」

いやらしいモーター音をお尻から響かせながら、ぼくは四つ足で、夜道を歩く。こんなことをされて、ぼくのちんちんは、かたくなっている。…なぜか分からない、けど、最近こうやってお尻を苛められるとちんちんが硬

くなっちゃうんだ…。どんどん体がおかしくなっていく。  
助けて。

自分の息が荒くなってくると、そのリズムがライガーとシンクロしていった。ぼくはライガーが規則的に吐く白い息を見ていた。これが犬。これが…。なら、ぼくは何者だ？

犬のフンを口にくわえ、お尻に尻尾を刺して、裸で四つん這い。その格好のまま、公園に到着した。

今まで、ぼくは自分が特に幸せだったなんて、考えたこともなかった。だけど、少なくとも今に比べたら幸せだった。なにも知らなくて平和だったあのころの思い出が、この公園にはいっぱい、つまっていた。頭の中に懐かしい友達の顔が思い浮かぶ。ボールを蹴って、カードで遊んで、けんかもしたりしたけどみんな仲良しで…。みんな…。なにしてるんだろ…。会いたい…。友だちに…。

つんと目頭が熱くなる。  
その時。

「だれだ！」

突然、大きな声とともに、だれかが懐中電灯の光でぼくたちを照らしたんだ。

第九章 出会う犬

心細い街灯だけが照らす公園の暗がりには、眩い光の輪。その向こうには高校生くらいの若い男の人。ぼくのことを怪訝そうな目で見下ろしていた。

人に見つかった！ 見つかった。…このひどい姿を、ぼくは見られている。けど、これで……。

ぼくは、照らされた醜態を隠すこともなく、泣いていた。これで……助かる……！！

「た、たすけ……」

「随分早いんだな、青龍」

……え？

頭の上で、ぼくを無視した会話がかわされていた。ぼくは、目の前に立つ青龍と呼ばれた人を見上げた。

「あんたが遅いんだよ玄武。朱雀も白虎も待ちくたびれてるぜ？ みんな、あんたの新しいペットを早く見た

くてお待ちかねさ。」

おじさんを、玄武と呼ぶその人……青龍は、ぼくのことをあらためてまじまじと見た。

「……ふうーん……この顔中クソ塗れの犬が、あんたの新しい犬か？ チビつつたつたつけ、汚い顔だなあオイ」

……ああ！ ……こいつも、おじさんの仲間なんだ！ 助かったと思ったのに……ぼくは深く落ち込んだ。助からなかったことに対してもそうだけど、おじさんみたいなおかしな人はこの世に一人だけだと思っていたのに……仲間がいるなんて。それとも、ぼくが知らないだけで、こんな大人がたくさんいるのだろうか。知らない人についていっちゃいけないとか、先生の言葉は全部脅かしてるだけ、オバケや迷信みたいなものだと思ってたのに……こんなことになるって知ってたらひとりでお店になんか入らなかつたのに……！！

ぼくのそんな心中も知らず、二人は会話を続ける。

「ああ。やつと今日からお披露目だよ」

「ふ。じゃあうちの犬も紹介しないと……」

こい！ タロ！

青龍がそういうと、その背後から……何かが出てきた。

「……え？……」

……おどろいた。そこに現れたのは……

「は……はじめまして……青龍様のペットの……た、

タロです……ッ」

そこに現れたのは、まぎれもなくぼくと同じ、人間の男の子だった。体格はぼくより少し大きくて、たぶん、歳も一個か二個、上だと思えた。全裸で、おすわりのポーズで、お尻に挿された太い尻尾を震わせている。ちんちんは硬くなって上を向いていて、それはぼくのよりもずっと、不自然なほどに、大きかった。タロと呼ばれた子も、同じようにぼくの顔を窺って見てる。恥ずかしい。

「げへげへ。相変わらずタロはデカイチンポぶらさげてるんだねえ……まったく、なに食ったらこんなみつともない体になるのか・なあ？」

玄武は、タロと呼ばれた少年のちんちんを、スニーカーの底でぐりぐり踏みつけた。

「うがつ!!……あ……も、もうしわけありません……玄武さ、ま……!!」

「おいタロ！ 挨拶がわりだ。チビ公のくわえているクソを喰ってやれ！」

「……は、はい……」

正面から、タロが這って近づいてくる。ぼくにはおじさん達の命令の意味を考える余裕なんてなかった。タロの顔が、ぼくの視界をさえぎるほどに近づいて、吐く息が、かかるほどになって……。

「ツウグ!?」

ぼくに、ぼくに……キスしたんだ！

「んっ……んむう……!!」

「いやがるなチビ公。タロに失礼だろ。ほれ、タロ！  
遠慮なくチビの口の中に舌を入れてやれ！」

「うむむー!!」

……生まれて初めてのキス……だった。

まさか男の子、と、こんなところで、こんな格好で、  
することになるなんて。タロの舌が、ぼくの口の中に入  
り、かき回して、口の中の汚いものを、自分の方に、掻  
き出そうとしている。ためらいもなく。いやでたまらな  
い。タロの唾で、かき回されて、余計にいやな味や臭い  
は、口いっぱいひろがるし。けど、間近のタロの、い  
や、タロと呼ばれてる男の子の、怯えきつた悲しい目を  
見たとき、ただぼくはなすがままに、任せるしかなかっ  
た。どんなに嫌悪感があっても、タロが、悪いんじゃない  
いから。

きつとこの人もぼくのように、誘拐されて酷い目にあ

ってきたんだ。こんな目にあってるのは、ぼくだけじゃ  
なかった……どうなってるんだ。こんなのおかしいよ。ど  
うしてお巡りさんや偉い人はこんな人がいるのに捕まえ  
てくれないんだ。

「おいおい。顔中クソだらけだぜ」

「ゲヘゲヘ。クソまみれでキスする変態ガキ犬か。見  
モノだな。こんなの、普通のスカトロポルノでだつてな  
かなか見られないぜ。げへへ、へへへへ！」

浴びせられる罵倒。最悪のファーストキスをさせられ  
ながら、ぼくは涙をこらえきれなかった。

「お、始めてるな？」

そこに、新たに男がひとり現れた。手に、玄武と同じ  
ようにリードを携えて、その先には二人と同じように、  
犬……四つん這いの男の子が繋がれていた。

「げへへ、久し振りだなあ朱雀。クロマルも元気そう  
じゃないか」

「ふふ……ほら、クロ。お前もご挨拶しなさい」

朱雀と呼ばれた男がリードを強く引くと、少年は小さく悲鳴をあげた。高い声だった。

クロマルと呼ばれた子は、ぼくと比べても、とてもい体つきだった。なのに、その頼りないほど小さなお尻には、ビールの缶みたいなの、信じられないほど太い尻尾が、ぶつすりと刺さっていた。

「ゲヘッ、クロマル、またケツの穴拡がったんじやないか？」

「昨日も拡張したからね……本当ならもっと太くても突っ込めるけど、今日は散歩からちよつと加減してやったのさ。俺は優しいからな」

「よく言うよなあ、げへへ。しかしすごいなあ。おい、お前もそのうち、このくらいの尻尾が入るくらいケツの穴ひろげてやるからな……」

頭を撫でられてぼくは身震いした。そんなこと出来る

わけない……だけど、現実には目の前の子は、そんな体になせられてた。一体、なんで……どうして、こんなこと……

大人たちはそんなぼくらに構わず会話を続けている。

「……あれ？ ゴンとカケルの姿がみえないな……白虎は今夜は来ていないんだな？」

「ああ。あの二匹ならもう昨日K市のほうに……たよげへ、なるほど」

言葉の端がよく聞き取れなかった。他にも、ぼくみたくいにこいつらに捕まった子がいるんだろうか。

「よし、クロも挨拶してやれ！」

命令された途端、クロは飛びつくようにぼくに駆け寄り、ぼくの顔を舐め回した。タロも、また近付いてきて同じようにぼくやクロマルの顔を舐め回す。

「オラ！ ぼさつとしてないでお前もやるんだ!!」  
ぎりぎりとキンタマを万力が締めつけた。

「ギイあつっ!!」

ためらう余裕なんかなく、ぼくは舌を出して、クロマルとタロの顔と顔の間に、割り込むようにし、舌で鼻先や、頬を、ぺろぺろ舐めた。ライガーよりもしょっぱい味だった。

三人の「飼い主」が黙って見下ろす中、僕たちの三枚の舌の、濡れた音だけが耳につく。

「ふうーん。この……チビ、だっけ？ なかなかいい舌遣いしているじゃないか。ほんの一月足らずでよくここまで仕込んだなあ」

「へへ、まあ一応プロだからな」

「まったくこのクソ犬なんか、ここまでしつけるのに半年かかったんだぜ？……なあタロ？ ついこの間まで、おれのこと変態とかキチガイとか罵っていたのに、今じやこのザマだけどなあ？」

見下ろされたタロは、少しうつむくような素振りだけ

見せて、声も出さなかった。

「返事もできねえのか！」

青龍の顔は、暗がりでもわかるくらい急激に、凶暴に変化した。ぼくも、お腹の底が重くなる。青龍は、小さなプラスチックの箱を取り出すと、それについたスイッチを、親指でスライドさせた。

「ぎやあああッ！」

その悲鳴は、ぼくよりは少し低いけど、紛れもない大人になってない少年の、悲痛な声だった。タロは股間を押さえてうずくまり、悶え苦しんでいる。

涙を流してヒーヒーと熱い息を漏らすタロ。その股間をよく見ると、肉の棒の根っこに金属の環がはめられていた。たぶん、リモコンで電流が流れる仕組みなんだろう。

「オラ、いつまで休んでるんだデカチン！……返事はどうなんだ？ ア？」



青龍は苦しんでいるタロの体を靴で踏んで揺さぶりながら、鞭のような言葉を浴びせていた。

「ああ、あ……は、ひ、はい……タロ……は、ご主人様のご調教のおかげで……り、りっぱなヘン……タイ、デカチン犬になることができました……」

「そううだ、それでいいんだ。タロ」

必死で息を整えながら口上を述べるタロを見下し、青龍はがらりと表情を変えて、満足そうにほほ笑んだ。

ひどい……。

ぼくはそつとタロの方をみた。そこには、服従するしかない哀れな奴隷犬の表情があった。

いや、ぼくは見逃さなかった。タロが、彼が一瞬……

眉を上げて、これでもか、というくらい悔しそうな瞳を見せたことを。半年以上も、ぼくがやられてきたような、やり方は違うかもしれないけど、犬に墮とす、奴隷に墮とす地獄を、味合わされてきたんだ。それでも、彼は……。

「ハハハ、もうそのぐらいにしておけ」

朱雀が言った。

「それより、早く始めようじゃないか ゲームのために集まったんだろ」

彼のその一言で、あとの二人も応えるようにほほ笑んだ。

対象的にぼくと鼻先を合わせた、少年ふたりは怯えた様子で体を震わせる。

「ゲヘゲヘ、今夜は楽しくなるぞ……チビ公の公園デビューだからなあ？」

……いったい、なにが始まるっていうんだ……？

## 第十章 哀しい犬

ぼくとタロ、クロマルの三人はそれぞれの主人に連れられ、遊具のない広いところまで引っぱり出された。普段はサッカーをしたりする場所だ。

「今日のゲームはボール投げなんだな。ルールは簡単。ボクがこれを遠くに投げたら、それを拾ってくれればいい」  
玄武の手の平には、ゴムボールが乗っかっていて。ボールはひとつしかない。つまり、取り合えってことだ。

ぼくのちんちんのリードは外されて、代わりに別のリングが取り付けられた。冷たい異物感。タロもクロマルも、同じものをつけられている。太さや大きさは、違うけれど。

「ゲヘヘ、もし逃げ出そうとしたらこれで感電死だからな。チンコを炭にされたくなかったら、変なこと考えるなよー？」

スイッチを目の前にちらつかせながら玄武が言った。

「さっさと三匹とも並べよ」

青龍がつまさきで土をけずってスタートラインを作る。そこに三人、四つん這いで並ばされた。

「フフ、汚い尻が三つも並んだぞ。いい景色だ」

朱雀がデジカメを取り出して、ぼくたちのお尻に向かってシャッターを切った。白いフラッシュに包まれ、ぼくはおもわず内股になる。

「一番出来が悪い犬っコロには、いつもの通り罰が待っているからな！ ……全力で走れよ？ チビ公」

玄武は、大声で宣言したあと、ぼくの顔をのぞき込んで、つけ加えた。「いつもの通り」 そういわれても、ここに来るのがはじめてのぼくには何のことか分からない。そう、ぼくにはわからなかった。クロと、タロ、このゲーム？の経験者であろう二人の、泣き出さんばかりの怯え方から、ロクでもないことだということだけは分

かるけど。

玄武が、高く宙に向かって球を投げた！

「よし、いけっ！」

すでに身を乗り出して二人に遅れを取り、ぼくは弾かれて横倒れになりながらも、街灯の光の中で落下する白いボールを追った。

(痛い……！)

いくら犬の生活を強いられていたと言っても、人間の手のひらや膝は、四つ足で走るようにはできていない。砂地のじやりじやりが、手のひらも膝も、痛めつける。腰にも痛みがくる。そして二本足の間の、お尻の穴の中で、固い尻尾が内側からお腹を苦しめた。けれどぼくは、痛みをこらえて精一杯速く進めるようにがんばる。二人があんなに怯えていた「罰」が、こわかったから。

出遅れたぼくだったが、すぐにトップに抜け出した。クロはその外見どおり、体力も体格も勝負にならな

かったし、体格的にはぼくに勝るタロも、先程の電気ショックが効いているのか、もともとかなり痛めつけられた疲労があつたのか、足がふらふらだった。

ぼくはわき目もふらず、一生懸命走った。すぐ目の前に、ゴムボールが見えた！

やった……！ ぼくは急いでそれを手にしようとした。……いや、駄目だ。あいつらのことだ。きっと犬が手を使うな、なんて言い出すだろう。

ぼくはボールを口にくわえようと頭を下げた。自分から、犬として動いているぼく自身にくやし涙が出そうになったけど、そんなこと今は関係ない。

でも、その時。

「バウツ!!」

聞き慣れた声と共に、黒い塊が矢のようにぼくの視界に飛び込んできた。ライガーだ！

「ああっ!？」

ライガーは、敏捷な動きでぼくの目の前のボールをさつと口にくわえると、軽やかに身を翻して、颯爽とご主人様たちの待つスタートラインの方に、駆け戻って行く。

「ああ……」

そんな……。ぼくは、ボールのなくなった砂地をただ、じっと見つめていた。蘇った膝の痛みだけが、空しくじんじんと疼く。

がつくりとうなだれて、四つん這いで戻ってきたぼくたち。もしかしたら、一番遠くまで行ったぼくが、一番バカを見たのかもしれない。

「一回戦はライガーの勝ちなんだな」

戻ってくるなり玄武はぼくたちにそう告げた。次の瞬間。

「つぎああああアッ……!!」

股間に、引き裂かれるみたいな痛みが走った。電撃が加えられたんだ。痛い！ 痛い痛い！ タロにもクロにも、同時に同じ仕打ちが加えられたらしく、苦悶の遠吠えが三重奏になって夜の公園にこだました。

「もつと気合い入れて走らんか！ 鍛えがいのないクソ犬だな全く！」

玄武が、うずくまるぼくをバカにしたように見下ろし足蹴にしなから言った。

「な……だ、だって不公平……ライガーに勝てるわけ……」

さすがにぼくは、くやしくて、涙目で玄武を見上げていた。

「不公平？ なぜなんだな？ 犬対犬。同じ餌食わせて、同じように躑けてやったろ？ 立派な勝負じゃないか？ ん？」

ぼくは言葉をなくしてしまった。玄武はそんなぼくの様子を気にすることなく、さっと振り返り、言い放った。

「さ、負けた三四で二回戦をするぞー!」

スタートラインに再び四つん這いになるぼくたち。電気刑の余韻の冷たい汗が、股の間や、お尻の肉も濡らしていた。体は焼けるぐらい熱かったはずなのに、震えていて、頭がくらくらする。

「位置について……」

条件反射で、きゅっと腰があがる。羞恥心なんかより恐怖が勝っていた。

かたなきや……!!

玄武がボールを投げ上げた。

一斉に走り出すぼくら。膝の擦りむける痛みにたえながら、懸命に前進した。

今度も、クロは遅れをとり、勝負はぼくとタロの

一騎打ちになった。

「はあ……はあ……っ!!」

電気ショックのダメージと、慣れない動き、膝の痛み……ぼくはごっそりスタミナを削られてしまったようで、じりじりとペースを落としていった。

一方タロは未だ血眼になってボールを追いかけていた。ペースはむしろ、上がっているように見える。ぼくが疲れたから、そう感じるだけなのか。少しずつだけど、差が出来ていってしまう。運動会のリレーでもこんなことがあったなんて、余計なデジャヴが頭をちらつく。

「待て……!! クソ……!!」

ぼくも懸命に後ろから追いつく。

「ハハハ! ガンバレー、デカチーン!!」

「チビもがんばれー! 負けたらまた、チンポビリビリの刑だからな! ハハハっ!」

はやしたてる外野の声。それでもなんとかぼくも追い

つく。どうやらタロは夜闇の中にボールを見失ったようだ。チャンスだ！こうなったら先にボールを見つけて。こんなゲームからさつきと抜け出してやる。

タロはさつきから動かない。…なんだろう、さすがに、ぼくは不安になった。そして、こっさりタロの顔を見ると……彼は、目をかたくつぶって……涙をこぼしていた。

「……オレは……!!」

「……？」

タロはなにかを呟いた。それがただの独り言だったのか、ぼくに対して言った言葉だったのか……それは、今でもわからない。

「オレは……本当はもつと足が速いんだ……!! オレは……ほんとは……サッカーチームのリーダーで……将来はぜったいカズみたいなサッカー選手になろうって……うっ、ウウツ………」

呪文のようにぼくの心に絡みつくタロの言葉。

「おれはもつと速いんだ……!! 二本足で走れば……!! ……あんな奴らに……あんな奴らに捕まらなければ……!! ……サッカーだって走るのだって出来て……う、うう、わああああああ!!」

最後には叫び声……というより、吼えるような声をあげてタロはラストスパートにかかった。

タロの……涙のしずくが、ぼくの頬に触れた、ような気がした。胸が、しめつけられた。

タロの気持ちだが、痛いほどぼくの心に沁みる。ぼくにも、普通の、人間の、生活が、あったんだ。明日もあさっても学校行って、友達と遊んで、みんなで晩ご飯を食べる。普通の……が、みんなしている、今もしているありきたりの暮らしが、あったんだ。それは絶望的に遠ざかって、もう、自分のものじゃないような気がするけど、あらためて思い始めれば、悔しさと、憎らしさと、悲しさに胸がはり裂けそうになる。

「……かえりたい……うちに……かえりたいよ……」

久々にそれを、声に出して、呟いていた。そういえば最近は何んだかこんな当たり前の願いすら、諦めて忘れていた気がする。

犬の暮らしなんか、もういやだ！ 叫びたい衝動を喉の奥にじっと飲み込んだ。

だけど、もう、タロを追いかける気にはならなくて、ぼくはゆっくりと、手足を止めてしまった。

ボールをくわえて、うれしそうな顔で戻ってきたタロは、本当に犬そのものの姿だった。きっとぼくも、そうなんだろうけど。

なんだか……今初めて彼の顔をちゃんと見た気がする。つんつんの髪、灼けた肌。運動のスキそうな感じ……頬は少しやせこけて、やつれている。こんな生活をさせられていれば、当然かも知れない。

「ねえ、君は……本当は誰？どこの学校？名前は？」

戻ってきた少年にぼくは思わずそう、話かけた。見つかったら怒られるなんて不安もこのときだけはなかった。「……もう、思い出せない……思い出せない。でも……」

かれは……ボールをくわえたまま……それでもこたえてくれた。切れ切れの、涙混じりの言葉だった。彼は続けた。

「タロなんかじゃ……ないんだ……！ 違うんだ。おれ……僕より少しだけ大きな少年は、そこまで言うと、ぼくに詫びるように頭を下げて、四つ足でスタートラインに向け、這っていった。」

ぼくは、わすれないようにしよう。自分が人間だってこと。どんな目にあたって、あんな哀しい目をするような「犬」にはなりたくない。

ぼくは、チビ公じゃない。ぼくは……………

「遅かったなチビ公」

カチツ！ 戻ってきた途端に電流の罰を与えられた。

「ぐっああああああああああああああああ!!」

ちんちんを焼かれるような痛み。血管に棘が突き刺さったような痛み。

痛い、痛い！ やめて！ もうとめて！ ……

「ゲへへへ！ 汚いツラだなチビ公！」

ぼくは裸の身を振って、胸から上を地面に擦りつけてもがいていた。鼻水と涙に土がついて、顔を汚す。それでも身を振り続ける。

「くっ……………あ、あ、ああ……………クツソ…おおああああ!!」

「野良犬以下なんだな、お前は」

玄武は大笑いしてぼくを見下ろした。堕ちていくぼくを、見下ろしていた。

これが、ぼくの現実だった。

第十一章 褒美と、罰を受ける犬

三回戦はぼくとクロだけの闘いだった。これに負けたら：ビリだ。きつとお仕置きされる。それはクロも一緒で：

だけど、クロの震え方は異常だった。歯がガタガタなっているのが隣にいたぼくにも分かる。：大人たちもそれに気が付いたのだろう。苦笑いを見せると、その子の飼い主：なんだろう。この中で一番年上に見える、朱雀って人がクロのお尻を撫でた。

「：わかってるとおもうが、お前はリーチだからな。負けたらどうなるか、分かっているな？」

そしてその大きな手で小さなクロの尻を引っぱたく。小さなその子は、その体に似合った高い悲鳴をあげた。：そのとき、ぼくは、クロのお尻に黒い痣を見つけた。いや、痣じゃない。それはよく知っている漢字の形をし

ていた。

【大】。確かにお尻のそれはそう書いてあった。まるで刺青のようだ。小さなお尻に書かれた、大きいというその漢字の意味するものがぼくには分からなかった。ダイというのがその子の本当の名前なのかもしれない。だけどそんなことを考えてる暇はなかった。もう、ゲームは始まってしまふ。

「よーい：」

緊張の一瞬。クロの小さなからだの震えが、見てて可哀想になるくらい大きくなる。涙までこぼしている。負けたら何が待ってるっていうんだ：。

「ドン！」

と、その瞬間だった。

「！……うあつ！」

突然、クロが横っ飛びに、こちらに体当たりしてきたんだ！

クロのからだが小さいと言っても、ぼくは全体重を前に、これから突進しようという方向に、傾けていたから、その予期しないアタックに堪らず、バタンと倒されてしまった。

「うぎつ……ぐああああッ……あうあ……くつ……」

地面に強く当たった尻尾の反動がお尻の中に強く響く。今まで入ったことのないくらい奥に、ぼく自身のの体重と倒れた勢いで尻尾は強く、突っこまれてしまった。

腸が破れるかと思うほどの痛み、恐怖、冷や汗。

苦痛から回復し、どうにか起き上がろうとする頃には、逆さの、掠れたぼくの視界に、ボールをくわえて戻ってくるクロマルの小さな姿が映った。クロマルの視線は哀しげで、ぼくを哀れむような、また一方、申し訳なさそうな、弱々しい光があった。

……なんで、こんなことするんだよオ……！ 声がで

たらきつと叫んだだろう。ずるいよ、卑怯だよ……。

力を失い、仰向けのままぐったりするぼくを尻目に、クロはちよこちよことゴールに戻ってきた。

「あくあ、今夜のビリ犬はうちのチビ公なんだな。せっかくみつちり舐けてやったのに、こんな調子じゃ先が思いやられるねえ」

嘲笑混じりで玄武が言う。それは酷くぼくを惨めにさせる言葉だった。

「だつ……だつてアレは……ぎひあああッ！」

言い訳を許す間もなく、電流の洗礼。ぼくは、全身をひきつらせて崩れ落ちた。

「今夜の罰ゲームはチビ公に決定！ ゲへへ……さて、じゃあ罰の前に、頑張った二匹の方には、ご褒美をやるねえ」

玄武がそう言い、二人に目配せをすると、青龍と朱雀は、なんの躊躇もなくズボンとパンツを下ろした。

その股間には、グロテスクな肉の塊が、固くそそりたつていた。そしてふたりは、それぞれ瓶をとりだすと、その中身のどろどろしたものを、自身の肉の棒に塗った。タロとクロは、おすわりの姿勢で待機していたが、ふたりの「準備」が終わるのを機に、とくに命令されることもなく自分からそれぞれの主人の前にいき、すがりつくように腰を浮かせ、血管の這うグロテスクなちんちんに、舌を伸ばす。

「ふんむ……は、ああ……」

「はあ……お、おいしい……をん……」

大人たちのちんちんに塗られたのは、ジャムのようなものだった。それをおいしそうに舐めとる二人の、いや、二匹の、淫らな舌遣い、びちゃびちゃという響き、何よりもうっとりとしたような目は、誇りや人の悲しみすら失った、堕ちた奴隷の、犬の、姿だった。ぼくは見たくなかった。聞きたくなかった。けど……

「ふふふ、バター犬そのものだな」

「へっ、こんなご馳走滅多に喰えないもんなあ？ オラっ犬っころ！ ケツにもご褒美ほしいんだろ!？」

「あ……ああ……はいい……お、お尻にご主人様のチンチンください！」

「た、タロの肛門に、ご、ご褒美をくださいッ！ お願いします！」

「ふん、だったらぼけっとしてないで尻をこっちに向けるよ、色ボケ犬！」

言われた通りふたりは、いそいそとからだの向きを変え、お尻を差し出す。主人たちはその尻の穴の尻尾をぐつとつかんで、乱暴に引き抜いた。

「くうあ！」

タロとクロの、その時出した高い鳴き声は、苦痛だけとは思えなかった。抜かれたあとは、黒い空洞がヒクヒクと蠢いていた。中でもからだの小さい方のクロマルの

お尻は、その小さなお尻に不釣合いな大きな穴が空いている。正直、気持ち悪かった。

クロマルのお尻にはやつぱり、【大】の文字。なんでこんなな気になるんだろう、ぼくは。：嫌な、予感がする。それはもしかしたら、犬になったぼくが持った、動物的な勘ってやつだったのかもしれない。

「へへへ：ほら、大事な尻尾はしっかり銜えている！」  
「ムグっ！」

今の今まで、自分のおしりに入っていた棒を、二人揃って口に押し込まれ、それを落とさないように、ぐつと噛まされた。そして、高く上げた尻に、大人の男の、勃起したそれが押しつけられ、ずるずると、飲み込まれていく。

二人とも歯を食いしばって、首を振って、うめくような声を漏らしているけど、合間に、甘い、うっとりしたような、高い、掠れた声も混じって、いやらしく、腰を

くねらせたりした。

「けっ、ガバガバな穴だな！ もっと腰ふれよタロ！  
気持ちよくなりたいんだろ？ え？」

「クロも負けないようにするんだぞ。ほら、腰を上げろ！ もっと奥まで飲み込め！」

膝の動きで、二人の男は、時折強く自分のモノをぐいっと押し込む。その時、のけぞるような犬少年たちの動きは、気持ちよさに力が抜けたようにも見えた。

「ああ、あーん……」

「うぐっ……あ……は……」

「ゲヘゲへ、二匹とも楽しそうなんだなあ」

腕組みして、いやらしい目で、その二組の動きを見物している、玄武。

それはぼくが生まれて初めて見る、セックスというものだと、ぼくにはわかった。けれど普通に大人の男と女がするものとは、何重にもずれたものだってこともわか

る。これは異常だ。こんなこと、しちやいけない。目の前に繰り広げられる光景に、圧倒されながらも、ぼくは、これが褒美なのなら勝たなくてよかったと思った。

「……さ、チビ公。お前には罰をあたえなくちやいけないんだな」

玄武が低い声で、つぶやいた。その手には長い皮の鞭が握られていた。

「その木に手をついて、ケツをあげな。へへ」

お尻を鞭でぶたれるのかな。でも、それくらいなら：

「ひああんっ！ ああああ！！」

狂ったような淫らな声をあげて、悶えるふたりの犬少年。あんなに風になるくらいなら、鞭の痛みに耐える方がマシだ。ぼくは冷えてきた自分の心に、そう呟いた。ぼくが命令通り木に手をつくると、玄武は、それを振るうのではなく、その鞭でぼくの両手を縛ったのだった。

さらに。

「ツア、いつ!!」

尻尾を強引に引き抜かれた。じくじくする、お尻の穴。

やっぱりぼくも、セックスさせられるのかな？ 無理矢理、お尻に変なものを入れられちゃうのか？ そう怯えたけど、玄武は更にぼくの予想外の行動をとった。

「けつ穴緩めな。……っていつでももうとつくにユルユルだけどな。ゲへへ……」

「ん……ッ」

入ってきたのは、ちんちんじゃなかった。もつと細い……。と、突然それがぐりぐり動き出したので、ぼくはそれが、指だとわかった。

「くっは、あ……ああ!!」

力が抜けて腰から崩れそうだった。指は執拗にぼくの穴の中をこねくりまわす……いや、その動きには意味があった。

なにか……ぬっている？

おなかの中の壁に、何かを塗りたくってるように思えた。玄武はひとしきり穴の中を撫で回すと、指を引き抜き、立ち上がる。そして、ぼくの前に立ちはだかると、腕を組んで見下ろした。

「……………」

「一体なにを……」

「不思議そうな顔をしてるな？ チビ」

玄武が言った。

【効き目】が出るまではしばらく時間がかかるから……それまで話でもするか。ちよつとだけ人間に、戻ってみる気はないか？」

ぼくは……どうしていいか分からず、ただぼうつと玄武を見上げる。

「げへへ……どうした？ 今だけお前が犬ってことは忘れてやる。言いたいことがあつたら言っていいいぞ？」

……玄武が、何を考えているのかはわからない。けど、

沈黙に耐えられずぼくは口を開いた。

「なんで……なんでぼくたちをこんな目に……」

「……げへっ」

玄武は小さく笑うと、そつと語り始めた。

「……アメリカ……」

「……？」

「イギリス、スウェーデン、カナダ、ドイツ、ロシア、メキシコ、ノルウェー……日本。世界各国どこにだって、犬好きがいる……犬のような奴隷愛好家がな。だが、国によつちや誘拐ひとつで死刑になる国もある。子供一人行方不明になつただけで国中で搜索する所もある。そういつた国の、自分の生活の安定を保ちながら、犬を求める奴らのために、適当な人間を攫って、調教してセックス・ファックで楽しめる体にして輸出する。それがボクらの仕事なんだな」

「……………！」

まるで夢物語みたいな内容。だけどそれを語る玄武は、冗談を言っているようには見えなかった。

「ガキを捕まえ、徹底的に、しつけて、しつけて……人間じゃなくなった頃に、外国に売る。もちろん、お前も例外じゃない」

「まさか！ そんなことが出来るわけ……」

そんなことのために、ぼくはこんな目にあってるのか？ 体から力が抜けるのを感じていた。

「ゲへっ、このビジネスはもう何年も続いている。今まで百匹以上の犬を売ってきたが、警察の調査が近づいてきたことすらない。武器や麻薬と違ってな、生き物は、どんな船にも乗っている。だからルートさえ確保しちまえばこんなに密輸しやすい商品はないんだよ。例えばそうだな、薬で眠らせた後、内臓を抜いた動物の腹の中に、隠すとか。金属探知機も麻薬犬も反応しない。誰も気づかない。そして運ばれちまえば二度と戻れない。ゲへ

へ……さて、と」

そこまで言うと、玄武はタバコを一本取り出し、火をつけた。そして、ぼくの髪を掴み、

「!!! ツギああああッ!!」

火のついたそれを、ぼくの額に押しつけた。

「やつやめッ！ えおおああ!!」

熱いタバコの刻印は、ずるずると横に真一文字に引かれる。出したいと思って出した声じゃない。ただ体が叫んでる、そんな感じ。苦痛にわめき散らして、気が遠くなったところにやっとなんか解放された。

「は……あ……」

「今お前に『一』という字を刻んでやった。もし、また競争で負けたら……焼き印を増やしてやる。こうやって……」

玄武は焼かれたばかりのぼくのおでこを指でなぞった。てつきり一の次だから二なのかと思ったら、まったく違

う方向になぞられた。

「ゲへ、『一』に払いを足して『ナ』。三回負けたらもうひとつ足して『大』」

ぼくは、クロのお尻の焼き印を思い出した。あれは、三回罰を受けたということなんだ。

「そして……四回負けたら……」

玄武は大に一つ、点をつけるように指を置いた。

「……ゲームオーバー。奴隷犬が完成。商品として売られるんだな。お前も売られなくなかったら、せいぜい頑張ってボクの言うことを聞いて……」

「いやだッ！ ぼくは、ぼくは犬になんかなるもんか！ ぼくは……」

そのときだった。

……ドクン……

「……あ？……」

「げへ」

突然、お尻の穴の、奥の方になにか感触、いや、気配を感じた。

……!?

おなかの中がなんだかヒクヒクいつてる……なんだかすごい……うんちがしたい……浣腸されたのとは違う……でちゃうんじやなくて……したい……！ なんだか腸の中が熱い……疼く……

か、からだの力が抜けて……

「ツアアア??！」

かつ痒い！ お尻の中が痒い！ 痒い！ ああああ  
ああッ！

ぎああうああ！ぎやつ…アアウアア！！

なんだこれ！ 何が、何が起こったんだよう！ お尻  
の中が、奥が、むず痒い……！ かゆい……ああ？ な、  
なんか入れて、肛門の中、ボリボリって掻きむしりたい！！  
あああ！ ああ！ はああか！ うはあああッ！

か……ゆ、いいいいいい！！

「げへ、たまらないだろ？」

玄武は、にやりと笑い、さっきぼくのお尻にぬり込ん  
だであろう薬品を、ぼくにみせた。

「なに、を……？？」

「ゲへへっこれは乾燥させた蚤の卵をこつてり練り  
込んだ軟膏だ。暖かくてしめったところに置けば数分で

孵るんだな。今お前のケツの中は次々に孵る蚤の幼虫が  
大暴れだ。ゲへ、げへへへへ！」

玄武の話していることを、理解はしたけど、もうぼく  
には、何かを考える余裕はなかった。

痒い、なにこれ、やだ、痒い、痛い、ひいああ…いや  
だいやだいやいやだいやだあああああ…

「あ……かゆひいいい！！ た、す、け、て……」

縛られた手も届かない。ぼくは身もだえして、涙を流  
して、苦しんだ。

「ゲヘゲへ！ 下手な媚薬よりよっぽど気持ちいいだ  
ろ？ え？ 変態犬！ チビ公？」

「あああああー！！」

かゆい！ かゆい！ 頭おかしくなる。

「か、掻いてえ！ 助けてえ！！」

「げへっ、どうしてほしいんだ？ ちゃんと頼めたら、  
考えてやらないでもないぞ」

こんなこといいたくない!! いいたくない! ……だ  
けど……このままじゃ狂っちゃう。我慢なんかできない  
……!

「チッチビ公のっ、穴、おしり、穴っ! かいてくださ  
い! ご主人さまああああ!」

「げへへ……やだ」

や、やだって……! がまんして、ちゃんと、恥ずか  
しいこと言ったのに。

くっ……ああああ!! 痒みがどんどん増してくる!  
痒い! 痒い! お尻の中が痒い!!

ああああああああ!!

もう何も構ってられない。ぼくはテレビのお笑いの人  
みたいに、ところ構わずお尻をこすりつけていた。けれ  
どお尻の穴が擦りむけるだけでちつともよくなならない。  
かゆいのは中なんだ。何か……

なっ……はああ!! ぼくは必死でこらえる。身を振つ

て、声をあげて、狂ったように尻を振って。

だけど、全然痒みはおさまらない。それどころかどん  
どん増して……あああ!! 蚤がおなかの中で孵っていく  
のがわかるみたいだ。ぼくのお尻の中を、暴れ回ってい  
る。助けて……!!

アアツアア! ツ! あひああああああ!!

か、かゆい! 痒い! かゆい!! かゆい! か  
つあああああつあつかああああ!!

な……なにか……

「いついれてえええ!! な、なにかお尻に……!! か、  
かんちよう!! 浣腸でもいいです、助けて、死ぬ、指、入  
れて……いやだあよあああ!」

恥ずかしい。だけどそれも一瞬の感情。とにかく痒い!  
もう! もう……堪えきれない! アタマがおかしくな  
りそう。いや、とうに、とうにぼくは、おかしくなっ  
ているのかもしれない。

「つつこんで！ ついてツ！ 入れてくだあはああ！！  
し、しつぽでも、ちんちんでも、何でもいいからあ！！」

絶叫。今となつては気持ちよさそうにまぐわう犬少年  
二匹が、羨ましくて仕方ない。気持ちよさそうだったも  
ん。ぼくは、ぼくは別に、お尻に何かいれたいわけじゃ  
ないんだ……ただこの痒さをどうにかしたいんだ。

「おねがいー！ おねがいー！！」  
しかし、玄武の答えは非情だった。

「おいおい、そんなノミだらけの汚いケツの穴をボク  
に触れっていうのか？ お断りなんだな」

そっそんなあ……！！ ……アア、アアアア！

あの二匹みたいに、ちんちんで、中こすってもらえた  
ら、楽に、なれる……。

アア！

痒い！ 痒い！ 痒い！ 痒い！ 痒い！

今お尻に手をつ突っ込んで爪をたててひっかいたらさぞ

気持ちいいだろう。もうなんでもいいよ！ もう、なん  
か、なんでもいいからお尻にいかけてかきませたい！ だ  
れか、なにか……ああああ！！

「ああああああああああああああ！！」

夜の公園に、ぼくの泣き叫ぶ声が、こだました。

「ゲへへ、うるさい犬だなあ。いくら喚いたって、お  
前のケツなんかにいれるものはないって、何度言えば……  
おっと、そうでもないみたいなんだな」

わざとらしい口調で玄武は言うのと、同じくわざとらし  
い視線をぼくの後ろに向けた。

ぼくも、なんとか後ろを振り返る。かすれる視界の中  
に見えたのは……

「げへへ……お前があんまりケツ振って誘うもんだ  
から、ライガーが発情しちまったんだな」

ライガーの、そのすらっとした足の真中に、一本の太い肉の棒が、禍禍しくそそり立っていた。

ライガーはぼくのお尻に顔を近づけると、鼻息荒くフンフンと臭いを嗅ぎ始めた。

「ひっあああ……!?!」

痒いのにくすぐったいのが追加されて、いよいよぼくはどうにかなりそうだった。

ああああああ……せ、せめて、舌でも尻の穴の中につつこんでくれたら、ラクになれるのに……。

「ラ、ライ、ガ……!!」

「げへへ、ライガーはお前のケツ穴に挿れたがってるみたいだぞ? げへっ、お前の尻尾にいつも塗ってやってたのはな、牝犬のフェロモンだったんだよ。お前のケツ穴は、メス犬のあそこと、同じだ。わかるか? チビ。オス犬がチンポ突っ込む穴と同じにおいが、お前の肛門からするんだよ。ひひ。だからな、お前がお願いさえす

ればライガーは、きっとお前にあの立派なチンポ、ハメてくれるぞ。お前が、お願いさえすればな」

そんな……! イヤだ! そんな……ライガーに犯される……犬とセックス……、するなんて……!!

いやだ……!! 絶対……!!

「げへ? どうする? ライガーのチンポ欲しいか? それとも朝まで、このままがんばってみるか? 気持ちいいらしいぞ、犯されるの。クロとタロの顔、見ただろ……?」

いやだ……!! 絶対いやだ……!! どっちも、どっちいもいやだよ!!

あがああああ!! 痛い方がました。気を失った方がました。もう狂っちゃった方が、ましたよう……。かゆいかゆいかゆい……。

もう……ラクになりたい……

自分でも情けないと思うよ？　こんなこと、口にするなんて。それは自分から、人間じゃなくなることでだって。

だけども、仕方ないじゃん？

だって……だって痒いんだもん……

「あ……ほ……ほしい……欲しいよお！……  
ください！　ラ、ライガーの……ライガーのチン  
ポ！　ぼ、ぼくのお尻につ、お尻……に……ライガ  
ーのチンポ、ぶちこんで、くださいいいいい！！」



「自分から犬のチンポはめてほしいって頼んで、交尾してケツふって、そんなに気持ちいい顔して……なあ、これでもお前、人間なのか？　これの……どこが人間なんだろうなあ？　チビ公。いや、もう一度だけでも、人間だったときの名前で呼んで欲しいか？」

トウルルルル……ケータイの着信音が鳴る。

「もしもし……げへ？　白虎かあ？　ああ、今公園で3人できるところなんだな……もちろん犬どもも一緒なんだな。……ああ、もうチビ公ならいつでも出荷できる仕上がりなんだな。かなりのドスケベ犬だからどこに売っても恥ずかしくないよ。へへ、げへへへ。」

げへ……そうだな。どうせならあそこに買ってもらうかなあ。同じ犬好きでも犬の改造・屑殺マニアが多い国だからなあ。　　ああ……わかったんだな。じゃあまた

明日」

玄武はケータイの電源を切ると、目の前にいる、うごめく二匹の犬を眺めた。

二匹の犬の、息遣いを縫って、ほど近い深夜の車道を走り抜ける車のエンジン音が、かすかに聞こえてくるのだった。

終章 犬になる少年<sup>ヒト</sup>

いつものように朝が訪れる。

ペットショップの店長は面倒くさそうにシャツターを押し上げた。中から聴こえる鳥や、リスや、ハムスターやウサギや猫や……「商品」たちの鳴き声。

いつものとおり店長が檻のひとつひとつにエサを入れていると、後ろから誰かに声をかけられた。

「いらっしやい、何かお探しで？」

「いや、申し訳ないがご主人、この写真の男の子を見たことがないかお尋ねしたいのだが……」

写真の中には、遠足だろうか、草じゅうたんの上に寝そべり、臍を出して、笑顔でピースサインを作っている少年が写っていた。

「さあ？ この子がどうかしましたか？」

「私の息子でね。……実はもう2ヶ月も前から行方不明で……」

「ほお、それはお気の毒に……。悪いけど、こんな、『人間』の男の子は見えていないですねえ……」

妙な口ぶりの店長に父親は一瞬怪訝そうな顔をみせたが、一礼すると店を出ようと踵を返した。

その後姿に店長が声をかける。

「……げへっ……どうですか？ 元気が出るように可愛い犬でも！ 明日には南米のほうに出荷する予定です  
が、よかつたらお譲りしますよー！」

……父親は聴こえないフリをして去っていった。その後姿を見て肩を竦める店長。

「げへへっ、残念。本当に可愛いイヌなのに、ねえ。  
ゲヘゲヘゲヘ」

誰にでもなく一人悦に入って呟く男。売りに出す前に、最後にもう一度かわいがってやるか。もう最近じゃ、ぼ

くが来ると嬉しそうにお尻を振って喜ぶ、売るのがもつ  
たいないくらいかわいいイヌだ。

店の奥に向かいかけた。その背中に幼いふたつの声が  
届いた。

「犬は好きかい？」

「うわあー！ かわいいなーこれー！」

「おいバカ手だすなよ！ 噛まれるぞ！」

兄弟だろうか友達だろうか。土曜日で、早めの帰宅の  
途中の少年ふたりだった。真新しい■■■■はまだ彼  
らが■■■学年であることをあらわしている。

(……幼犬の注文が確か入っていたな。たまには二匹  
同時っていうのもいいかもな。げへへ……)

店長……玄武は、そつと小さな二人のそばに近づくと、  
優しく、声を掛ける。

(了)

この作品を初めて書いたのは……7年前。狂ってたなあ俺。(笑)  
汚辱兄弟という長い作品を書き終えて、消失感を感じつつも、心のどこかに燃ってたものが形になったのがこの作品だと思えます。「監禁」「調教」という、汚辱でも使ったスタンダードなテーマでどこまで「とりきくーや」を出せるのかを意識してた作品です。

この話の主人公には名前がありません。チビという名づけられた名前がありますが、主人公像は可能な限りほかしてきたくもりです。自分の好みの少年を想像できるように……汚辱が自分のリビドーをぶつける作品だったので、この作品ではみんなの中のリビドーを引き出すことを狙ったのですが、うまくいったのかどうか。当時は挿絵をほとんどつけてなかったんで、キャラデザインは1からのスタートでした。最初は写実的な画風を当てようと考え……何かしつくりこなくて。ラフを何枚も何枚も切っては捨て……やつと生まれたのがこのチビ公です。以前から読んでくださっている方にも、新しくこの作品を知ってくれた人にも気に入ってもらえるといいなあ。

最後になりましたが、この作品をよみがえらせてくれたとりさんに、そして最後まで読んでくれたみんなに心から感謝を。限られた人しか見せられない、誇れる作品ではないのかもしれないけど、この作品を一人でも楽しんでくれたなら、それだけで嬉しいです。本当ありがたいとだけだぜ。

とりきくーや

ども、場末のシヨタ文章書きとりさんと申します。日頃はWEBで反社会的なシヨタエロ小説を書き散らしています。

さて、まだシヨタ同人の世界を知って間もない、自分が作り手でなかった頃、「児童販売鬼」というサイトがあり、とりきくーさんはそのサイト以前から精力的にシヨタ鬼畜「小説」を創作しておられました。当時とりきくーくらしいパワフルな鬼畜小説書きは、他にはまず見つからなかったですね。そんなWEB小説のなかで、たぶんとりきくーさん自身にとっても最大最高の作品である「汚辱兄弟」と並んで、僕が好きだったのが「犬小屋」です。

そんな作品の復刻に加われて、すごくうれしいです。あ、でも文章はかなり僕のものになってる部分も多いですが、細部まで含め責めを構想したのは全てとりきくーさんです。悪人はとりきくーさんです。そんなとりきくーさんに、また新作鬼畜シヨタ小説を書いて欲しいと思う今日この頃です。

とりさん



「クロコル、散歩だ」

ご主人さまが言いました。何日ぶりだろう。いつもうすぐらい部屋にいたので、時間も日づけも、だいぶ前からわからなくなりました。でもぼくは犬なので、時計やカレンダーは関係ないのです。

ぼくはずっと前、人間の子どもでした。学校にも通って、勉強もしていました。僕も人間の友達と同じような姿をしていました。最後の誕生パーティー、七歳だったかな……。人間のときは、肌も着ていました。今は裸で、四つん這いで、しっぽもつけてもらったので、すっかり犬らしくになりました。

こんな風になるまで、とてもつらかったです。どうして犬なのに、人間のすがたに生まれてしまったのでしょうか。最初から犬で、言葉もしゃべれなくて、家に住んでベッドに寝て肌を着たこともなければ、何もつらいことはなかつ

たのです。

ご主人さまは、ぼくが「ハッ」を人間だと言うので、とても怒って、僕を棒やむちでムだらけになるまで叩きました。紐で縛って、四つ足で動けないようにしました。ごはんもくれなくて、何日も水が全くない、今のここより暗くて狭い箱の中に閉じこめました。

ぼくが全く動けなくなった頃、ご主人さまはやっとぼくを箱から出してくれて、犬のしっぽや手足をつけてくれて、ぼくが犬だとわからせてくれたのです。

ご主人さまはいつもは、その、ぼくを箱から出してくれたときみたいな優しいしゃべり方をします。でもぼくがだらしないと、とてもきびしいのです。むちで叩く以外に、おしりやおちんちんに、ビリビリと電気を流します。でもぼくが一番つらい罰は、ごはんを抜かれることです。最高で五日間くらい抜かれました。ご主人さまに言われないと、何日かわからないけど。

おしりは、とてもいいぬいにしてつけてくれます。ぼくのお尻の穴は、ここで飼われるようになった日から、ずいぶん大きくなって、気持ちよくなるようになりました。人間のとときも、うんちするのは気持ちよかったです。犬になっ  
てはじめて気づきました。今は、しばらくたっておかれると、かまってほしくてたまらなくなります。ご主人さまはお薬もお尻に入れてくれて、いろんなものでかき回してくれます。

でも、そんな日もたぶん、もうすぐ終わるのです。もしかしたら今日かもしれせん。

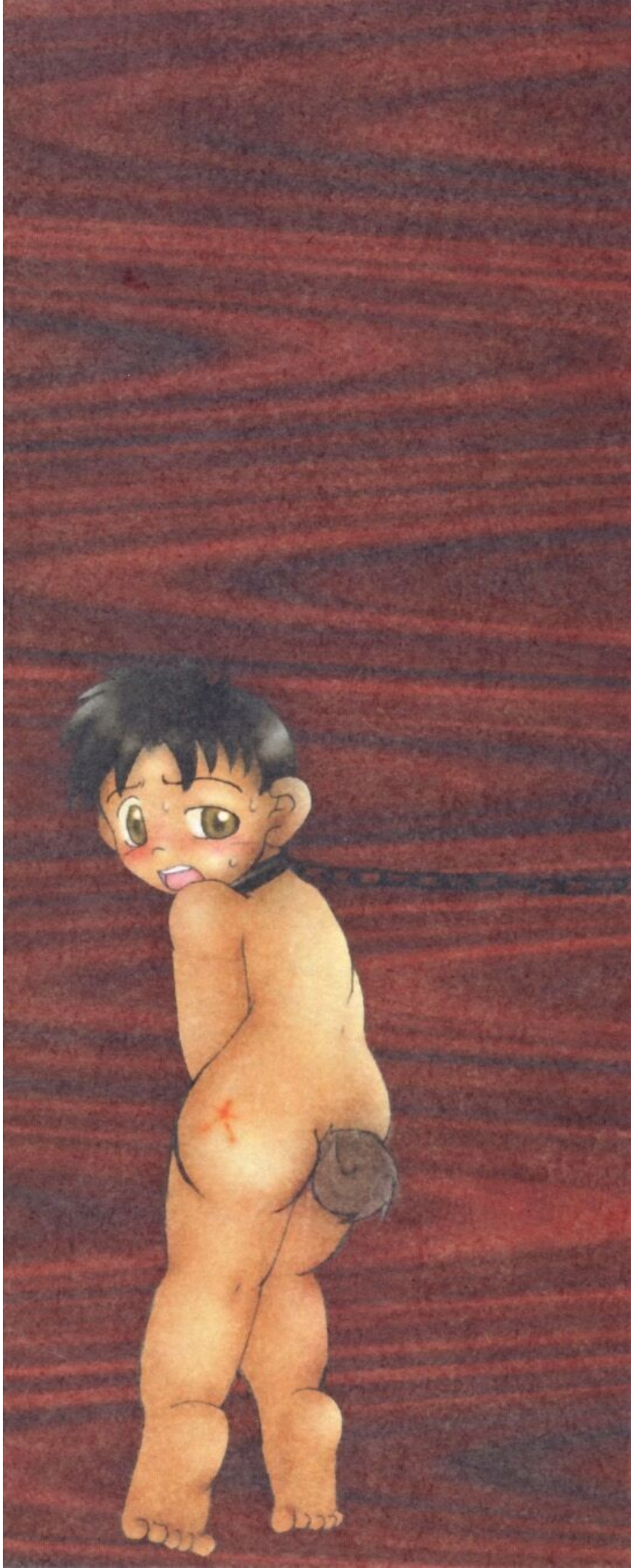
ぼくのお尻には、漢字の「大」の形に、熱いもので線が引かれています。散歩は、毎日が勝負なのです。ぼくはあと一回負けたら、外国に売られるのだそうです。外国のご主人さまの中には、買った犬を毎日いじめたり、ばらばらにして食べたりする人もいるんだそうです。ぼくはこわい。

本当は今だっとてもつらいけど、もう新しくこわい目にあうのはいやなのです。今なら、ごはんは楽しみだし、ご主人さまもやさしい時もあるし、気持ちいいことも、いろいろあるから……。

だからぼくは、がんばります。ぼくより大きな犬が相手でも、さいしょからあきらめたりはしないのです。



「犬小屋」 2008/02/17  
飛ぶちからと夢幻堂  
torikick@mail.goo.ne.jp  
印刷：コムフレックス



原作：飛力空灼（飛ぶちから）  
<http://tobutikara.web.fc2.com/top.html>  
推敲：とりさん（夢幻童）  
<http://shirayuki.saiin.net/~torisan/NL5060/>

## その夏、ぼくは犬になった -...

2008年夏、一人の少年が町から姿を消した。ペットショップの家畜牢で毎夜繰り返される、少年への騷めという名の虐待・拷問。

未開発の性器は、飼い主を称する中年男性に玩具として扱われ排泄器以外の役目を果たせないはずの肛門は、しっほの穴として日々開発が成されていく。

ゆっくりと、人間としての自我を奪われ、汚され、貫かれ…

そして、少年は「忠犬・チビ」として調教されていく。

「ほら、かわいいワンちゃん。ちんちんだ、やってみろ。」

「いやだ、ぼくは犬じゃ…ない…！」

少年陵辱作家コンビの作り出す、醜いまでに淫らしい仔犬の飼育記録。